注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
バカと俺と召喚戦争

【作者名】
流離のコガラシ

【あらすじ】
寝坊して遅刻してしまいＦクラスになってしまった、真田（さなだ）昴（すばる）。
先祖の真田幸村並みの、戦略を立てて勝つことができるか。
Ｆクラスという非日常の日常をどうすごせるか？

初めてなので文がなってないところもありますが、ご了承ください。

ムッツリーニ×工藤愛子もできればやりたい…

俺と遅刻とみんなとの出会い

はじめまして。
わしはＯｈキド。みんなからはバカテス博士と呼ばれておるぞ。
（そんなふうに呼ばれてないよ―）
この世界には召喚獣と呼ばれるオカルトのかたまりがいる。
そしてその召喚獣というオカルトのかたまりを人は戦わせたり殴らせたり…
そして…
私はこの召喚獣の研究をしてるという訳だ。
では、初めに君の名前を教えてもらおう！

―――――――――――――――
―　自分で決める　―
―　織田昴　―
―＞真田昴　―
―　直江昴　―

―　伊達昴　―
―　Ｏｈキド　―
―――――――――――――――

こいつはこの小説の作者。君を書いた人でありお前の名付け人でもある。
・・・えーと？
名前はなんて言ったんじゃったかな？
―――――――――――――――

――自分で決める――

――悪シノビ――

――〈流離のコガラシ――

――ファルコォォォォォォォォォォォォ――

――三沢――

――――――――――――――――――――

そうだそうだ！思い出したぞ

流離のコガラシという名前だ。

真田昴！いよいよこれから君の物語のはじまりだ。

夢と冒険と！バカと俺と召喚戦争の世界へ！レッツゴー

※これは転生ではありません。

桜舞い散る中、一人の少年が走る。

「やべー遅刻だわｗｗｗ。まあ振り分け試験、遅刻しといて今頃なんだけど…」

そんなとき、少年の後ろから声が来る。

「おはよう。君見たことないね。ひょっとして振り分け試験寝坊したバカな転校生？」

見た感じバカっぽい少年だな。

「振り分け試験寝坊した、ただの転校生だ。」

なぜだかこいつにはバカ呼ばわりされたくないと思う。

「へぇーやっぱそうなんだ。あっ僕、吉井明久だよ。よろしくね」

「俺は真田昴だ。こちらこそよろしく。ってこんなことしてる場合じゃないぞ!!はやく行かないと、遅刻するぞ!!」

そう言って少年は走る。

「真田に吉井。お前ら初日から遅刻ぎりぎりだぞ」←西村先生

「あっ、すいません」俺

一応謝っとこう。この西村先生は、ゴリラとチンパンジーを融合したような人だ。

「失礼なことを考えるな。」←西村先生

なんだこの教師は!?俺の心を読みやがった。
「真田、お前は自分が何クラスか分かっとるよな。吉井これがお前のクラスだ!!」↑西村先生
そう言って封筒を渡す。

「真田、お前に話がある。吉井お前は先に行っとけ↑」西村先生
吉井が去った後　西村先生が大きくため息をつく。

「真田、成績優秀なんだから、遅刻するな。朝、しっかり起きろ。なんなら俺が起こしてやってもいいぞ」
このままでは、ホントに起こしに来そうだから胡麻化しておこう。
「いえ、大丈夫です。以後気をつけます」
といい逃げておいた。後ろからはまた、西村先生のため息が聞こえた。

そう。俺は振り分け試験を遅刻したため、Fクラスになってしまったのだ。

Fクラスに近ずくと、「ダーリン」と声がした。
遅刻しといてなんだが、このクラスには入りたくないと思ってしまった。

「おっ、お前か振り分け試験、遅刻してこのボロイFクラスに入ることになったやつは」

「さすがに汚すぎるだろ」←俺
「俺はFクラス代表、坂本雄二だ」←雄二
「俺は真田昴だ。よろしく」←俺

「あっ昴君だ。昴君もFクラスだったんだ」←明久
「なんじゃ明久知り合いかのう？」
「今日朝会っただけだ」←俺

「紹介するよ。こっちが真田昴君で、この可愛い女の子が木下秀吉で、そこのカメラ構えてるのが、土屋康太で…」←明久
「ちょっと待て明久よ。ワシは男じゃぞ。真田よ、ワシは男じゃからな」←秀吉

そんな会話をしてると先生が入ってきHRが始まる。
「ガラッ」
と扉が開き可愛い女の子が入ってくる。
「あのすいません、保健室に行ってて遅れました。姫路瑞樹と言います よろしくお願いします」
「「「「「イヤホォォォォぉぉ」」」」」
「何で姫路がここにいるんだ。Aクラスじゃなかったのかよ」
「そんなことどうでもいい。とにかくあの胸をみろよ」
「姫路さん結婚してー」
とバカ騒ぎになってHRどころではなくなってしまっていた。

2話　第一次試験召喚戦争編　開幕

調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。

この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いられるべき金属合金の例を一つ上げなさい。

姫路瑞希の解答
問題点…　マグネシウムは火にかけると激しく反応する為危険であるという点。
合金の例…　ジュラルミン
教師のコメント
正解です。合金なので『鉄』ではだめだというひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

吉井明久の解答
合金の例…未来合金←すごく強い
教師のコメント
すごく強いって言われても…

ＨＲも終わったがクラスは、あいかわらずさわがしい。

「よかった。このままだとこのクラス、女子が秀吉一人のところだったってイターい何これ。頭蓋骨がミシミシいってるんだけど」←吉井
「何がこのままだと女子が秀吉一人よ。」
「ごめん。島田さん。けどやっぱり、島田さんってＦクラスなんだアー痛いよこれ以上強くしないで――――――」←吉井
「何、私がＦクラスがお似合いなの!!」
「落ち着いて二人とも」←俺
っととっさに止めてしまった。

「何よ、転校生？まあいいわ。」
「ありがとう…」←吉井
吉井が死にそうだ。
「ウチは島田美並。趣味は吉井を殴ること」
「すごい趣味だな…。俺は真田昴だ」

そこにに姫路が入ってきた。
「私は姫路瑞樹です。得意なことは料理です。」
「姫路さん何でＦクラスなの」←島田
「あっそれはですね、私生まれつき体が、弱くてそれでテスト中に倒れちゃったんです。」←姫路
「俺と似ているな」←俺
「お前はただ寝坊して遅刻しただけだろ」←坂本
「お前は黙っとけ。」←俺

「ねえ雄二ちょっといい」←吉井
「なんだゴミ」←坂本
「ちょっと来て」←吉井
そう言って坂本を連れて行ってしまった。
まあ気にすることは、ないだろう。

「お前らちょっと聞け！」↑坂本
　いつの間にか、戻ってきた坂本がなんか言ってる。
「おめーら、こんな設備で不満はないか!!」↑坂本
「「「大ありだ」」」↑バカたち
「俺は、Ａクラスに勝とうと思う。」↑坂本
「えー何言ってるの」↑バカ
「姫路に秀吉がいるなら何もいらない」↑バカ
　さっき大ありだとか、行った奴がもう弱気になってる。
　まあ、俺も無理だと思う。なぜならＡクラスとＦクラスでは、点数が圧倒的に違う。
「大丈夫。策はある。」↑雄二
　普通なら反対だか、俺は歴史が大好きだ。圧倒的に不利でも、大軍勢に勝った武将はいくらでもいる。現に俺の先祖の真田幸村もそういう人だ。だから
「下剋上か。面白い」↑俺
「昴、お前は賛成か」↑雄二
「ありがとう昴くん。」↑明久
「なんでお前が礼を言うんだよ…」↑俺
　そういうことで、俺たちＦクラスが、Ａクラスに召喚戦争を挑むことになってしまった。

3話

問題（国語）
以下の意味を持つことわざを答えなさい
（1）得意な事でも失敗してしまう事
（2）悪い事があったうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え
『（1）弘法も筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら〝河童の川流れ〟、〝猿も木から落ちる〟、（2）なら〝踏んだり蹴ったり〟や〝弱り目に祟り目〟などがありますね。

吉井明久の答え
『雄二も木から落ちる』

教師のコメント
坂本君は猿ということでしょうか？おっと裏面に補足がありました。
『雄二は猿ではなくゴリラ』
坂本君は吉井君にとってゴリラ扱いなんですね。

「坂本。ところでさっき言ってた、策ってなんだ？」←俺

「ああそれか。それは、姫路だ」←坂本
「たしかに姫路はＡクラス並みみたいだけど、一人じゃ話にならんだろ。」←俺
「姫路を甘く見てもらっちゃ困るぜ。姫路は学年の５本の指には、はいるからな。」←坂本
　確かに、５本の指に入るのは、すごいだろう。しかし、
「姫路、一人じゃ勝てんだろ。他に誰かいるのか？」←俺
「ああもちろんだ。おいムッツリーニ来い。」
「なんだ。俺は忙しい。」←土屋
　忙しいと言ってるくせに、カメラで姫路のパンチラを狙っている。
「見ての通りだ。」←坂本
「見ての通りってどういうことだ？しかもなぜ土屋がムッツリーニなんだ？」←俺
「ムッツリーニは、人よりも断然エロに興味があるのに、口では興味ないって言ってる。だから寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ。」
「俺はエロになんか興味ない。」
　すきま風が吹き込んできて、姫路のスカートがめくれる。
「ブッシャーーーーー」←土屋
「ムッツリーニーーーーーーー早く輸血を!!」←吉井
　土屋の鼻から鼻血が、勢い置く放出ている。て言うか大丈夫なのだろうか。
「まっ、見ての通りだ。ムッツリーニはちょっとしたエロでも、鼻血をだしてしまう。しかし性の知識が豊富で、そのせいか、保健体育だけはＡクラスに匹敵する。」←坂本
　なるほど。これからはムッツリーニって呼ぼう。そう言ってる間にも、吉井が輸血を終えている。なぜか手慣れているようだ。いつも、やっているからだろうか？
「あいつらのことは、ほっといて次に進めよう。他の戦力は、数学はＢクラスの島田だ。」←坂本
「ハロハロー。ウチは数学はできるから、数学はまかせて。」←島田

「まあ、他の教科はFクラスの平均だからな。」←坂本
坂本がぼそっと、言っている。

「そして、我がFクラスのエース、明久だ。」←坂本
「やっと僕の紹介か。」←吉井
「吉井って頭いいのか？」←俺
「こいつは観察処分者だ。」←坂本
「ん、それってバカの代名詞じゃないの？」←俺
「よく知っているな。「雄二、そこは否定してよ。」←吉井
「バカなのは本当だろ。」←坂本
「僕のどこがバカだって言うんだい。」←吉井
「あんたは全部バカでしょ。」←島田
「島田さんまで…」←吉井
「だったら、明久。大化の改新が起きたのは何年だ。」←坂本
大化の改新といえば、無事故の改新で６４５年だ。
「ぼ、僕がそんなの間違えるわけないじゃないか。」←吉井
「だったら早く答えろ。」←坂本
明久が難しい顔している。
「明久はこんなんも解けないほど、バカだ。しかし、観察処分者の召喚獣は、物理干渉能力があって、教師の雑用に使われるため、操作がうまい。認めたくないが召喚獣操作は、学年で一番うまい。
まあ、その代わりフィードバックがあって召喚獣が、ダメージをうけると、自分もダメージを受ける。だから、生贄としてはサイコーなわけだ。」←坂本
「ちょっと雄二。僕を生贄にする気、まんまんじゃないか!!。」←吉井
「当り前だろう。俺は、お前が痛がってるのを、見るのが大好きだ。」←坂本
こいつら、二人は本当に、友達なんだろうか。

「ところで雄二よ。それだけでＡクラスに勝てるほど、甘くないじゃろ。」←木下
「俺も木下に賛成だ。これだけで勝てるとは思えない。」←俺
「真田よ。」←木下
「なんだ。木下。」←俺
「ワシは、双子でのう。まぎわらしくなるといけんから、秀吉と呼んでくれればよいぞ。」←木下
「わかったよ。秀吉。ところでお前って双子なんだ。」←俺
「そうじゃ。姉はＡクラスにおるのじゃ。」←秀吉
「へー、Ａクラスに…。お前とは大違いだな。」←俺
「しかし、秀吉には演劇があるからね。」←吉井
「演劇ねえ…」←俺
「そんなことより、作戦を発表する。」
「作戦？」←吉井
「ああ、まず今日はＤクラスに試験召喚戦争を挑む。」←坂本
「Ｄクラス？Ａクラスじゃないの？」←吉井
「今の戦力じゃＡクラスに勝てない。お前は、こんなことも分からんのか。やっぱりバカだな。」←坂本
「Ｄクラスに手を貸してもらう、ということだろ」←俺
「ほう。分かるやつがいたか。」←坂本
「どういうことですか」←姫路
「バカじゃないの。坂本も真田も。他のクラスと一緒に戦うなんて、できないことぐらい知ってるでしょ。」←島田
「島田、だからお前も、吉井みたいにバカなんだよ。」←俺
「さり気に僕が、バカにされたような。」←吉井
「じ、じゃあどういうことか、説明しなさいよ!!。」←島田
「このクラスが、Ａクラスに勝つには、一騎討ちしかない。しかし、普通に交渉しても、危険な一騎打ちなんてしない。だから、Ｄクラスとかを使って、攻める姿勢を見せるんだろ。いくらＡクラスだからって言って、雑魚を何回も倒すのは面倒だからな。授業が潰れて補習が増

えるし。」←俺
「けど、負けたクラスは、3カ月宣戦布告できないのよ。それぐらい、知ってるでしょ!!」←島田
「はあー。やっぱお前バカだな。追い詰めたところで、相手に和睦をさそってみるんだろ。だよな、代表さん。」←俺
「説明する手間が、省けたな。こいつが言ったように、Aクラスには、一騎討ちでいく。だから、最低でもDクラスとBクラスぐらいは、利用したい。ということで、明久。さっそく今日の1時から試験召喚戦争が、できるように宣戦布告してこい。」←坂本
「ちょっと待って。下位クラスが上位クラスに、宣戦布告するときって、絶対、ぼこられるよね。」←吉井
「大丈夫。安心しろ。上位クラスがそんなことするわけないだろ。」←坂本
　坂本が見え見えの嘘を、言っている。さすがの吉井でも、
「そうだよね。じゃあ行ってくるよ。」
　あっさりだまされてた。吉井、さっき坂本が、吉井が痛めつけられるのを見るのが大好きとか、言ってただろ。まあいいや。
「試験召喚戦争のルールや、召喚獣の扱い方があまり分からないから、誰か教えて。」←俺
「なら、これでも読んどけ。」←坂本
　召喚獣マニュアルっという本を渡された。まあ、暇だし読んどくか。

召喚戦争のルールや召喚獣の使い方を、一通り読み終わったとき、ぼろぼろになった明久が戻ってきた。

４話

問題（物理）
以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい
『光は波であって、（　）である

姫路瑞希の答え
『粒子』
教師のコメント
よく出来ました

土屋康太の答え
『寄せては返すの』
教師のコメント
君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え
『勇者の武器』
教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

「雄二、僕を騙したな。」←坂本
あれで、騙される吉井も吉井が。
「騙した？人聞きの悪いこと言ってんじゃねえ。お前、自ら生贄になりに行ったんだろ。」←坂本
「今度は騙されないぞ。」←吉井
今のに、騙すところがあっただろうか？
「お前の独り言に、付き合ってる暇はない。Ｄクラス戦の作戦を説明する。」←坂本

吉井は相変わらず、怒っている。
「しかしじゃぞ。Dクラスっと言うても、こっちはFクラスじゃぞ。戦力の差は大きいのじゃ。」←秀吉
「なに、たぶん大丈夫だ。」←坂本
「大丈夫って何か根拠でもあるのよ。」←島田
「それはだな、まだ初日だから、クラスの人の状況が分からない。そこで、姫路だ。」←坂本
「わ、私ですか？」←姫路
「そうだ。Dクラスだって、まさかFクラスに姫路がいるとは、思っていない。だが、姫路は今んところ0点だ。だから今回の作戦は、姫路が回復試験を、受ける時間を稼ぐことだ。そして、姫路の回復試験が終わったら、姫路で敵の代表を打ち取る。そのために、前線部隊と中堅部隊、本隊に分ける。前線部隊の隊長に明久、副官に島田、あとバカども5，6人連れって行っていいぞ。中堅部隊の隊長に真田、っと思ったがお前、振り分け試験、受けてないんだったな。」←坂本
「いや、大丈夫。最後らへんにきて、古文と数学だけは受けれてるから。」←俺
「古文と数学か。まあ、姫路がいれば勝てるからな、死ぬ程度に頑張れ。」←坂本
「死なない程度にだろ。」←俺
「よし、中堅部隊の隊長を真田、副官を秀吉。あと、バカども5，6人連れて行っていいぞ。そして、本隊は俺副官に須川でも、置いとくか。」←坂本
「坂本、お前が死ななかったら負けないからな。今回は時間稼ぎだからな。俺は、初めてだから、今回はお前に任せるか。」←俺
「なんだ、ずいぶん強気だな」←坂本
「まあ俺は血筋的に戦略、考えるの得意だからな。」←俺
「血筋的にって？」←吉井
「いや、俺の先祖が真田幸村なんだ。」←俺
「「ええーー」」
「真田って名字珍しいけどさー。」←島田

「意外だった」←ムッツリーニ
「真田幸村は、秀吉に従ってたからな、俺も秀吉に従うかな。よろしく、秀吉」←俺
「こっ困るのじゃ。第一ワシは男で…」←秀吉
「冗談だよ冗談。」←俺
「からかうのは、やめてほしいのじゃ。」←秀吉
「照れてる秀吉は売れる…」←ムッツリーニ
「売れるってどういうことだ？」←俺
「ムッツリーニが盗撮したのを、裏で売ってるんだよ。」←明久
女子にばれないように、小声で言ってる。
てか、ムッツリーニすごいな、犯罪だぞ。
そんな、たわいのないこと？を話し時間が過ぎ、１時になった。

「てめーら。行くぞ。」←坂本

「「「「おうっ!!」」」」

5話

問題（科学）
『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え
『C６H６』
教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』
教師のコメント
君は化学を舐めていませんか

吉井明久の答え
『B－E－N－Z－E－N』
教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように

真田昴の答え
『C６H４Cl２』
教師のコメント
それはパラジクロロベンゼンです。

「みんないくよ。」←吉井
「なんでお前についていかなきゃ、いけないんだよ。」←バカ
「俺は、中堅隊で秀吉と、いっしょがよかった。」←バカ
「なんなら、俺も回復試験で姫路と、いっしょに受けようかな。」←バカ
　みんな吉井の言うことを、聞く気がない。吉井を隊長にしたのは、まちがえじゃないだろか。
「ちっ、仕方がない。中堅隊も一緒に行ってくれ。」←坂本
「おいおい、そんなんで良いのか？」←俺
「今回は時間稼ぎが、目的だからな。姫路が回復すればいい。」←坂本
「分かった。よし、行くぞおめーら。」←俺
「えー真田かよ。」←バカ
「真田って誰だ。」←バカ
　誰もついてこようとしない。こんなクラスで大丈夫か？仕方がない秀吉に頼もう。
「おーい、秀吉様。」←俺
「なんじゃ、真田よ。あと、ワシに様を、付けるにはやめてくれるかの。」←秀吉
「あー、ちょっとこれを、バカたちに言ってくれるか。」←俺
　そう言って、耳打ちをする。
「分かったのじゃ。」←秀吉
　これで大丈夫だろう。
「皆よ、ワシに続いて来るのじゃ。」←秀吉
「「任せとけ。」」
「お前、さっき。行きたくないとか。言ってただろ。」←バカ
「何を言ってる。俺は最初から、やる気まんまんだったぞ。そんなこ

とより、お前こそ…」←バカ
「お前こそ何言ってる。俺は、最…」←バカ
まったく、醜い争いが始まった。秀吉が一言、言うだけでこれなんだから。しかし、これで連中も戦うだろう。
「僕、もう死にたい。」←吉井
そんな中、吉井がそう呟いてた。

教室を出ると、もうDクラスがそこまで来ていた。バカの争いを止めるのに、てこずっちゃたなー。仕方がない。
「「試験召喚獣サモン。」」←モブたち
おっと早速、戦いか。召喚戦争では、相手に戦う意思があるのに、逃げたら補習になってしまう。助かったことに数学だ。それじゃあ、
「しk「「試験召喚獣サモン」」←吉井、島田、秀吉
先を越されてしまった。

Fクラス　数学
島田　２４８点
吉井　２３点
秀吉　３５点

Dクラス　数学
モブA　１６２点
モブB　１４９点
モブC　１３５点

島田はさすが数学が得意なだけあってBクラス並みだ。相手もFクラスであんな高得点で、びっくりしている。

「なんで、Ｆクラスはバカの集まりじゃないのか!?」モブＡ
「しかし、よく見ろ。あとの二人は、米粒レベルだぜ。」モブＢ
　その通りだ。吉井と秀吉は、いないに等しい。さすがはＦクラス、よくこんな憎い点が取れるもだ。そんなことを、思っているうちに、島田が一匹倒している。吉井は使い慣れているだけあって、うまい。
「０点になったものは、補習!!」←西村先生
　西村先生が戦死した生徒を、かつぎあげている。なんだあの化け物は。
「鬼の補習なんて、嫌だ―」←モブＡ
　鬼の補習って何なんだろう。あとで坂本にでも、聞いておこう。
「まずい、これでは俺も鬼の補習だ。援軍を頼む。」←モブＣ
　そんなことを、言ってると、島田が残りの召喚獣も切り戦死させる。
「いやだー。鬼の補習なんて～」←モブＢＣ
　いつの間にか戻ってきた、西村先生に二人ともかつぎあげて行かれる。だから何なんだ。あの教師は。
「ちょろいもんね。」←島田
「さすがだな。しかし敵がまた来たぞ。」←俺
「お姉様～。美春が助けに来ました。」
「げっ、美春!!」←島田
　あれは誰だ？お姉様って島田のことか？
「どこにいるのです。お姉様のペッタンコの胸を狙う豚どもは!!」
　なるほど、そういうことか。
「島田、妹を大切にしてやれよ。」←俺
「妹じゃない。これは清水美春。私の体を狙ってくる…」←島田
「そんなことより、お姉様。一緒に豚どもを倒しましょう。」←清水
　島田も大変そうだな。吉井はというと…
「アキちゃん好きです。」
「ちょっと待ってよ。玉野さん。」←吉井
　何やってんだ。状況が全く読めない。
「早く召喚してください」←モブ教師
「ほら、早く召喚しようよ」←吉井

「仕方ないですは。」←清水
「「「「「試験召喚獣サモン」」」」」←モブD～Fと美春と玉野
Dクラス　数学
清水　１３２点
玉野　１７４点
モブD～F平均１５０点
これはちょっときついか。俺たちも、バカたちを連れてきたような…
すっかりビビって逃げていた。戦力にならねーな。これなら、吉井や秀吉のほうがまだましだ。
「真田、後ろから援護お願い。」←島田
数学は、点数があるから、俺も戦うか。
「試験召喚獣サモン!!」←俺
そう言って、出てきたのが、両手に木刀で学ランだ。これじゃ吉井と同じだな。
「Fクラスの豚がいくら増えようとも…」←清水
Fクラス　数学
真田　３７５点
「なんよ、あの点数!?」←清水
島田のBクラスで、驚くのだから無理もない。味方からもどよめきがおきる。
「すごいよ。昴君。昴君がそんなに頭いいなんて。」←吉井
「すごいのじゃ。ワシの１０倍はあるぞ。」←秀吉
まずは、清水の召喚獣に切りつけに行く。っとミスって島田の召喚獣も一緒に切ってしまう。
「なんですわのー」←清水
Dクラス　数学
清水　０点
「何でウチもなのー。」
Fクラス　数学
島田　０点

あっ、ミスっちゃったなー。
「0点になったものは、補習!!」←西村先生
「真田、おぼいてなさい!!」←島田
「あーすまん。召喚獣の扱いこれが初めてで。」←俺
「お姉様と一緒なら鬼の補習何て、へっちゃらですわー。」←清水
西村先生にまた連れて行かれる。ごめんよ。わざとじゃないんだ。

そんなとき、
「遅れてすみません。試験召喚獣サモン!!」
姫路が到着したのであった。

6話

問題（英語）

以下の問いに答えなさい

『ｇｏｏｄおよびｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『ｇｏｏｄ　－　ｂｅｔｔｅｒ　－　ｂｅｓｔ

ｂａｄ　－　ｗｏｒｓｅ　－　ｗｏｒｓｔ』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『ｇｏｏｄ　－　ｇｏｏｄｅｒ　－　ｇｏｏｄｅｓｔ』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。Ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾に－ｅｒや－ｅｓｔを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『ｂａｄ　－　ｂｕｔｔｅｒ　－　ｂｕｓｔ』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

「姫路さん、回復試験終わったんだね。」↑吉井
「そうだ。ちなみに俺もいるからな。」↑坂本
「雄二!!」↑吉井
「坂本。お前が何でできている!!」↑俺
　なぜ坂本が、出てきている?あいつ自身、死んだらいけないことぐらい、分かっているはずだ。
「いやちょっと姫路を送りに…」↑坂本
　しかし、姫路なら負けるわけないのだから、わざわざ送りに来なくても、大丈夫なはずだ。
「姫路さん、ゴリラなんかほっといて、一緒に戦いましょう。」↑バカ
「そんなことより、保健体育の実技しましょう。」↑バカ
　…そういうことか。坂本は姫路をDクラスから、守るんじゃなく、このバカたちから守るために、出てきたのか。さっき逃げたバカどもも、いやがる。
「理解してくれたか。」↑坂本
「ああ。嫌なほどにな。」↑俺
　そんなことより、相手は驚いている。
「なんで、姫路がここに!?」↑モブD
「Fクラスになんで姫路が―」↑モブE
　そりゃ驚くよな。普通にやれば勝てる相手なのに、こんなに苦戦するんだからな。
「みなさん頑張りましょう!!」↑姫路
「「「ウォーー」」」」↑バカたち

Fクラス　数学
真田　３５１点
姫路　４２３点
坂本　７１点
吉井　１４点

秀吉　８点
バカたち２０人程度　平均５０点

Ｄクラス
玉野　１４９点
モブＤ～Ｆ　平均１５０点

さすが５本の指にだけは入る姫路だ。こんな短時間に、よくこんなに点が取れるものだ。そして、姫路がＤクラスに攻撃する。

Ｄクラス
玉野　０点
モブＤ～Ｆ　０点
「アキちゃ――――ん。返事聞かせてください。」←玉野
「「鬼の補習なんて。」」←モブたち

西村先生が今度は、４人同時に担いでいる。だからなんなんだ、あの人は!?
圧倒的な強さで、その後も、敵を倒していく。すごいというより、えげつない。

そ　し　て

「なんで、姫路が!?ウギャーーーーーーー!!」←Dクラス代表　平賀源二

Dクラス　数学

平賀　0点

Dクラス代表

平賀源二　討死

あっけなく終わってしまった。

「「「「よっしゃーーーーーーーーー」」」」」←バカども

Fクラスは飛びあがり、生き残ったDクラスの人たちは、落胆した表情だ。

「Dクラス代表さんよ。条件さえ飲めば設備は、交換しなくてもいいぜ。」←坂本

「「「なんだって」」」←Dクラスの連中とFクラスのバカ

そうだ、この戦争は勝つのは前提で、あくまでも目的はDクラスに協力してもらうことだ。て言うかなぜFクラスが驚いている。さん

ざん説明されただろ。
「おちついてほしいのじゃ。雄二にもいろいろあるのじゃろ。」←秀吉
「そうですよ。坂本君なりに考えがあるんですよ。」←姫路
「秀吉と姫路がいうんじゃ仕方がない。」←バカ
　なんとかおさまってくれたようだ。でこっちはというと…

「その条件とはなんだ。」←平賀
「簡単なことだ。俺たちの狙いはAクラスのみ。Dクラスなんかに用はない。だから、今度Aクラスとするとき、俺の言うことを聞いてくれ。」←坂本
「し、仕方がない。」←平賀
　条件を飲んでくれたようだ。

「よし、引き上げるぞ。」←坂本
「ふう、やれやれ楽勝だったぜ。」←バカ
「俺様のお陰だな。」←バカ
　戦いから逃げたバカどもが、よくそんなことが言えるもんだ。まあいい。それより俺の召喚獣の操作、下手すぎたからな。西村先生にでも頼んで練習させてもらおうかな。そんなことを思う俺であった。

そしてその後のみんな

補習室にて…

「お姉様～一緒に保健体育の実技しましょう。そして、元気な女の子を産んで暮らしましょう。」←清水
「美春！ウチたちじゃ子どもは産めないのよ。」←島田
「愛さえあれば、関係ありませんわー。」←清水
「ウチと美春のどこに愛なんてあるのよーーー」←島田
「お前らうるさいぞ。補習６時まで追加だ!!」←西村先生
「ひえええええ」←島田
そんななか
「アキちゃん。何で返事くれなかったんだろ。」←玉野

一方同時刻の教室では

「ブルっ」←吉井
「どうしたのじゃ明久よ。」←秀吉
「いや、ちょっと寒気がしただけだよ。」←吉井
「おかしいのう。もう４月なのに寒いなんて。」←秀吉
「バカだから仕方ないだろ。それより明久。試験召喚戦争中に、告られたって本当か？」←坂本
「「ガサッ」」
「雄二なに言ってるのさ。ほらみんな、武器離して。」←吉井

いつの間にかＦクラスの連中が覆面に黒のマントに鎌を持っている。
「坂本、どういうことだ？これ。」←俺
「ああこれはな、ＦＦＦ団だ。」←坂本
「ＦＦＦ団？」←俺
「そうだ。女子と接点でもあったりするとああなる。告られたとなるとなると、すごいものだぞ。」←坂本
と、ニヤニヤしながら説明してくれた。
「坂本、お前吉井を売ったな。」←俺
「あたりまえだ。」←坂本
ホントにこいつら友達なんだろうか？
「お前は入ってないのか？」←俺
「ああ。俺、自らやる必要もないしな。このクラスで入ってないのは、俺とお前と、秀吉に姫路に島田だ。まあしかし、姫路と島田に関しちゃああだがな。」←坂本
そう言って指差した方を見ると
「吉井くーん。それってホントですかー。」←姫路
ものすごく怖い。紫色のオーラが見える。
「姫路さん誤解だよ。」←吉井
そんなことを言ってる間に、ＦＦＦ団にぐるぐる巻きにされている。
「姫路は嫉妬か？」←俺
「ああそうだ。しかし、明久はバカだからきずいてないけどな。」←坂本
「須川会長、準備できました。」
「よし、諸君、ここはどこだ？」←須川
「「最後の審判を下す法廷だ！」」
「異端者には？」←須川
「「死の鉄槌を！」」
「男とは？」←須川

「「「愛を捨て、哀に生きる者！」」」
「宜しい。これより……２―Ｆ異端審問会を始める。」←須川
「被告人　吉井明久。　罪状　バカの分際でＦＦＦ団幹部にして女性に告られた。」
「これをどう思う。」←須川
「死刑」
「死刑」
「死刑」
「さっさと死ね。」
「よし、こいつが長く苦しむように殺してやれ。」←須川
「「「イエッサー」」」」

ったく、こんなクラスでよく勝てたな。Ｄクラスに申し訳ないわ。これが日常の風景なんてすごいもんだぜ。俺までおかしくなりそうだわ、っと心から思ったのであった。

ちなみにあとで生きていた、吉井に聞いてみたところ西村先生は、戦死者に「鬼の補習」を施して「趣味が勉強。尊敬するのは二宮金次郎」という理想的な生徒に教育し、通称『鉄人』らしい。俺も今度から鉄人って呼ぼう。

７話　吉井と姫路と愛妻弁当

以下の問いに答えなさい

『女性は（　）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が１．５ｋｇに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均１２歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しすぎです。

Ｄクラスへの試験召喚戦争の次の日、簡単に言うと回復試験期間、１日目。この文月学園では召喚戦争後、２日間、回復試験期間がある。１０教科、正確に言うと総合科目いれて１１教科、全部消費したとしても、２日間あれば十分、回復できる。そのかわり、授業の時間を減

らすので補習の時間が増える。上位クラスが試験召喚戦争、したくない理由もここにある。現にここにも

「回復試験なんてやってられないよ。」←吉井

ったくめんどくさいのは分かるが、こちらから召喚戦争を挑んだのだ。しかたあるまい。

「Ａクラスを奪うためだ。少しは我慢しろ。そんなことよりお前は三角形の面積の公式でも覚えとけ」←坂本

「なにを言ってるんだ雄二!!僕だって三角形の面積の公式ぐらい言えるよ。底辺×高さでしょ」←吉井

「÷２が足りない。」←ムッツリーニ

「・・・」←吉井

「吉井、お前良く高校入れたな。」←俺

「何を言ってるんだい昴君。僕はこう見えても頭良くてね。さっきのもアメリカンジョークだよ。」←吉井

「坂本、こいつはそんなに頭が悪いのか?」←俺

「ああ、どうしようもないぐらい屑だ。」←坂本

「雄二、僕のどこがクズなんだい。３６５。どこから見ても美少年じゃないか。」

「明久よ。５。おおいじゃろ。」←秀吉

「実質５。…」←ムッツリーニ

「もうみんな嫌い!!」←吉井

吉井は正真正銘のバカだったようだ。

やっと午前の授業が終わった。このクラスだと真面目に受けてるのが、俺と姫路と島田と秀吉だけだからな。他のやつらは、大体グラビアやエロ本読んでるし、ムッツリーニは姫路のパンチラ狙ってる。

坂本は自分の興味がないことは全くやらないから寝ている。というわけで俺と姫路と島田と秀吉だけで授業を受けている感じだ。しかし、島田は数学以外はバカで秀吉に関しちゃ全教科バカだ。だから結局のところ、俺と姫路だけが授業を受けている感じだ。教師たちも気の毒だな。こんなクラスに教えるなんて。まあそんなことは、どうでもいい。今はメシだメシ。

「いただきます。…。ごちそうさま。」←吉井
　今のはなんだ!?食べ始めたかと思ったら、次には食べ終わったぞ。
「ああ、おなかすいた。」←吉井
「どうしたのじゃ。明久よ。昼食があるじゃろ。」←秀吉
「秀吉。もう食べ終わったよ。」←吉井
「食べ終わったじゃと!!ちなみに明久よ。何じゃたんじゃ?」←秀吉
　俺も気になるところだ。あんな短時間で食べ終わるなんて…
「ああ、塩と水と油だよ。」←吉井
　えっなんて言った?塩と水と油?聞き間違えだよな。
「すまん明久よ。もう一度言ってくれんかの。」←秀吉
「塩と水と油だよ。」←吉井
　聴き間違えじゃなかったようだ。ちょっと待て塩と水と油って…
「明久よ。塩と水と油って食べ物ではないじゃろ。」←秀吉
　俺の疑問を秀吉が言ってくれた。
「いや実はね、ゲームに使っちゃってね。」←
　やはり吉井はバカだった。
「明久君。お昼ないんですか。」←姫路
「うんちょっとね…」←吉井
　姫路の前ではいいところ見せたいのか、言い訳している。そうなってる時点んで、見苦しいのが分からないのか。
「よろしければみなさん。明日お弁当作ってきましょうか?」←姫路
「いいの!!姫路さん!!」←吉井
　吉井、目がキラキラしてるぞ。
「分かりました。じゃあみんなで明日のお昼、食べましょう。」←姫路

というわけで明日は姫路が、みんなの分作ってきてくれることになった。そんなことより今日のメシだメシ。

そして次の日の昼

正確に言うと回復試験期間2日目。

「やったー姫路さんが作ってきてくれたの楽しみだな。」←吉井

「瑞希、こんなところで吉井にアピールなんて…」←島田

島田がぶつくさ文句言ってたのは興味ない。っというわけで俺たち（俺、秀吉、島田、坂本、吉井、ムッツリーニ）は屋上にいる。なぜ屋上かって？そりゃあFクラスで食べると命の危険にかかわるからだ。今は姫路が弁当を教室にとりに行って、俺たちは先に屋上に来ている。

「姫路の弁当かの。楽しみじゃの。」←秀吉

「楽しみ…」←ムッツリーニ

そういう俺も楽しみだったりする。昔から俺の両親は海外の仕事で弁当なんて自分以外で作ったことがない。

どんな弁当か楽しみだな。

「お待たせしました～」←姫路

おい、いくら吉井のためだって張り切りすぎだろ。おせち料理とかいれるやつじゃないか。

「瑞希…頑張ったわね。」←島田
「よくこんな作ったな…」←坂本
「すごい量…」←ムッツリーニ
「はい、朝早くに起きて頑張っちゃいました。」←姫路
「ありがとう。姫路さん。」←吉井
「それじゃさっそくいただくとするか。」←坂本
　坂本がエビフライを取ろうとすると、横からムッツリーニがひょいっと横取りしてしまった。
「おいムッツリーニ。人のをとるなこの野郎。」←坂本
　そんなことお構いなしにムッツリーニはエビフライを食べた…と同時に倒れた。ぶるぶると痙攣している。どっどういうことだ。
「あれ土屋君どうしたのですか？」←姫路
「ああたぶん、あまりのおいしさに倒れちゃたんだよ。」←吉井
　吉井それは、無理あるぞ。さすがの姫路でも…
「そうなんですか。よかった」←姫路
　あっさりだまされた。おい姫路きずけよ!! ムッツリーニ青くなってるぞ。
「姫路に島田。二人ともお茶を買ってきてくれないか。」←坂本
　どうやら女子にはこの料理は食べさせないらしい。
「分かったわ。瑞希、行くわよ。」←島田

　女子がお茶を買いに言ってる間にどうするか。
「おい真田。これをどう思う。」←坂本
「どうもこうもこれには毒が入っているようだな。しかも作った本人がいれたようだな。」←俺
「どうするのじゃこの料理。」←秀吉
「明久。どんなのにも勝つ最高のスパイスがある。」←ムッツリーニ
「ムッツリーニ生きてたんだね。」←吉井
「俺はこの程度じゃ死なない。」←ムッツリーニ
　そういってるが実際は青くなってふるえている。
「最高のスパイスとは愛だ。それさいあれば、どんな毒にでもか…て

…る。ドサッ」↑ムッツリーニ
「ムッツリーニーーーーーーー」↑吉井
とうとう向こうの世界に行ってしまったようだ。
「ムッツリーニ、愛さえあれば何でもできる!!。おりゃーーー」↑吉井
といい坂本の口に突っ込む。
「ウグッ、グハッ」↑坂本
「何をするのじゃ明久よ。大丈夫かの。雄二よ。」↑秀吉
坂本は抵抗をやめている、というか向こうの世界に行ってしまったようだ。
「お待たせしました。っあれ?」↑姫路
姫路たちが戻ってきたようだ。
「お弁当ね。雄二がおいしいおいしいって言って食べちゃたんだよ。」↑吉井
「よかった。けど明久君が食べてないんじゃ…あっそういえばデザート作ってきてたの、忘れてました。今から教室に取りに行ってきます。」↑姫路
「「げっ」」
「ほらみんな喜びなさいよ。せっかく瑞希が作ってきてくれてるのよ。」↑島田
なにも知らない島田がノー天気にいうのであった。

そしてその後、生き返った俺たちは、坂本と吉井が作った、女子には姫路の料理を食べさせない、っと言う条約に、勝手に加えられてしまった。

8話

以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『①脂質　②炭水化物　③たんぱく質　④ビタミン　⑤ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『①砂糖　②塩　③水道水　④雨水　⑤湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

さあっと回復試験期間も終わり、Bクラス戦だ。
「坂本、Bクラスとはどういう人たちだ？」←俺
「Aクラスになれそうでなれなかった連中だ。代表が根本恭二だけあって、一番まとまりの無いクラスだ。」坂本
「一番まとまりのないクラス？まとまりのないのはFクラスの方が上だろ。」←俺
「いや、Fクラスは一番まとまりのあるクラスだ。特に異端者を狩るときとかな…」←坂本
確かにこのクラスはある意味まとまりがあるな。
「けど、まとまりが無いんだったら簡単じゃないの。」←吉井
「すぐそう考えるからお前はバカなんだ。Bクラスの代表は評判は悪いが悪知恵があるやつだ。油断すると勝てない。っと言うわけで明久。Bクラスに宣戦布告してこい。」←坂本
「雄二!!今度は騙されないぞ。」←吉井
「大丈夫だ。Bクラスは美少年好きが多いらしい。」←坂本
おいおい坂本流石の明久でも…
「そうなんだ。言ってくるよ。」←明久
…騙されていた。さすが学年一のバカだ。

「坂本、また吉井を犠牲にしたな。」←俺
「いやー助かるぜ。簡単に騙されるバカがいて。」←坂本
うん分かった。吉井と坂本は友達じゃ絶対にない。

「雄二!!また僕を騙したな!!」↑吉井
　予想どうり吉井はボコボコで帰ってきた。
「あんなんで騙されるお前が悪いんだろ。」↑坂本
「そんなことより今回の作戦はどうする？」↑俺
「そんなことってどういうことだよ昴。僕の体が心配じゃないの。」↑吉井
「全く興味ない。」↑俺
「もうみんな嫌い!!」↑吉井
「今回の作戦か。とりあえず姫路とお前で根元を倒すしかないからな。それまでの敵は雑魚どもに任せるしかないな。」↑坂本
「簡単な作戦だな。大丈夫なのか？」↑俺
「安心しろ、こっちには秘密兵器がある。ムッツリーニ!!あの情報は確かだな。」↑坂本
　ムッツリーニがどことなく現れる。
「間違えない。早く死の鉄槌を加えてやりたい。」↑ムッツリーニ
　なんか危険なワードが聞こえたような。
「落ち着け、行動を起こしては負ける。」↑坂本
　なんだろう。作戦って？
「とりあえず一旦解散だ。あっ、真田とムッツリーニはちょっと残ってくれ。」↑坂本
　俺とムッツリーニを除く他の連中は一旦解散となった。

「わざわざ残したってことは、秘密兵器のことか？」↑俺
「ああそうだ。ムッツリーニの情報だが根元とCクラスの代表の小山は付き合っている。」↑坂本
「付き合ってる？別に高校生だから付き合うぐらい普通じゃないか？これのどこが秘密兵器に…まさか!!」↑俺
「ああそのまさかだ。このクラスのバカどもに情報流したらどうなる。」↑坂本
「間違いなく、根元を殺しに行くだろう。」↑俺

「ああだからそれを利用するんだ。」↑坂本
「坂本、つくずく思うんだが、お前って外道だな。」↑俺
「どうも、真田にムッツリーニ、絶対にこの情報を流すなよ。すべてが水の泡になる。」↑坂本
「分かった。」↑俺
「了解…」↑ムッツリーニ

召喚戦争が始まったが予想どうりの苦戦だ。戦力配分は

前線部隊　隊長　吉井　副官　島田　バカ１０人ぐらい
中堅部隊　隊長　秀吉　副官　武藤　バカ１０人ぐらい
本陣　隊長　坂本　副官　俺　姫路＋バカ１０人ぐらい
偵察　ムッツリーニ
伝令部隊　隊長　須川　副官　影薄すぎて忘れた

だ。
「そろそろやるか。おー「失礼します」
だれだ？
「Ｃクラスのものです。Ｂクラスからの伝言を預かってきました。」↑

Cクラスの子
　Cクラス？なんか危険な感じがする。
「要件を聞こうじゃないか。」←坂本
「Bクラスが音楽室で、休戦協定を結びたいそうです。」←Cクラスの子
「休戦協定ねえ。」←坂本
「どうするんだ？」←俺
「別問題ないからなあ。一応本陣のメンバー連れていくか。行くぞ姫路、真田。」←坂本
「分かりました。」←姫路
「分かった。」←俺
　あやしいが悪くない話だからな。

「来てくれたのかいFクラス。てっきり来ないかと思ったよ。」←根元
　向こうも護衛として5，6人連れているが教師の姿が見えない。
「それより休戦協定の内容を教えろ。」←坂本
「ああ明日の午前9時まで一旦休戦ということだ。悪くない話だろ。」←根元
　どうする坂本は。
「分かったぜ。明日の午前9時までだな。」←坂本
　というわけで協定を結んだ…

…ひどいもんだ。教室に帰るとシャーペンは折られ消しゴムは穴だらけだ。
「ふっなるほどな。」←坂本
「どういうことだよ!!雄二!!」←吉井
吉井が抗議している。確かにいきなり休戦で教室に戻ってみればこのありさまだ。
「見ての通りだ。俺たち本陣が協定作っている間によくここまでしたもんだ。」←坂本
「ひどいもんじゃの。」←秀吉
「けど誰がこんなことをBクラスのほとんどが、僕たちと戦ってたよ。」←吉井
「Cクラスの奴らだ。BクラスとCクラスは裏でつながってたんだ。」←俺
「なんてひどいことを。」←姫路
「そんなことよりCクラスが召喚戦争の準備をしている。」←ムッツリーニ
「相手はどこなの?」←吉井
「たぶんFクラスだ。」←坂本
「っち、俺たちはいっぱい食わされたということか!!」←坂本
「これからどうする。」←俺
「作戦に変更はなしだ。しかし連戦はきつい、だから秀吉、Aクラスのお前の姉のふりして、Cクラスを挑発してきてくれ。」←坂本
「なんじゃと。」←秀吉
「闘う相手を変えてもらうってことか。秀吉、頼んだぞ。」←俺

「ちょっと待つのじゃ。そんなことしたらワシは姉上に…」↑秀吉
「たのむよ秀吉。」↑吉井
「そこまで頼むんじゃったら断れんじゃろ。わかったのじゃ。やってみるのじゃ。」↑坂本
「頼んだぞ。秀吉。」↑坂本
「もとはと言えば雄二が油断してたのが悪いんだよ。油断するなっと言ったのは雄二じゃないか!!」↑吉井
「黙れカスが。まあ油断してたのは確かだな。しかし、やられたらやり返す。倍返しだ！」↑坂本
「半沢〇樹だよねそれ。」↑吉井
「俺もあのドラマは好きだからな。この状況でぴったしの言葉だ。」↑坂本
「とにかく秀吉、頼むぞ。」↑俺
「任せてほしいのじゃ。」↑秀吉
　そんな中姫路は何かを探しているようだった…

９話

以下の英文を訳しなさい

『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｙ.』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です．きちんとできていますね。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのはＴｈｉｓだけですか

吉井明久の答え

『☆●◆▽♪＊―　―』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

そして次の日

「秀吉。これを着てくれ。」←坂本
そう言って〝女子の〟制服を渡す。なぜ女子の制服を持っている!?さすがこのクラスは変態ばっかりだな。
「分かったのじゃ」←秀吉
そんなことも普通のように着るている。そんなんだから女って思われるんだろ。なにが『ワシは男じゃ』だよ。
「着れたのじゃ。」←秀吉
って着替えるのはやっ!?流石は演劇部、早業だな。

「秀吉が女子の制服着てるぞ。」←バカ
「秀吉!!やっと自分が女の子だって分かったんだね。」←吉井
「これは売れる…」←ムッツリーニ
「明久よ。ワシは男じゃぞ。あとムッツリーニよ。カメラで撮るのはやめてもらえんかの。」←秀吉
流石はFクラス。バカたちはやっと秀吉が女の子って分かってくれたって喜んでるし、ムッツリーニは鼻血だしながら激写している。
「おーい。秀吉。作戦結構だ。頼んだぞ。」←坂本
「任せるのじゃ。」←秀吉
やっとなり済まし作戦が始まるようだ。

「ここからは、俺たちはついていけない。お前に任せた」←坂本
「できる限りのことはしてみるのじゃ。」←秀吉
結局、見に来たのは、俺、坂本、吉井、ムッツリーニ、島田だ。姫路は忙しいようだった。
「秀吉ってそんなにすごいのか?」←俺

「まあ見とっけて。」←坂本
いまさらだけど大丈夫なんだろうか。

「失礼するわ。」←秀吉
「なに？あなたはＡクラスの木下さん。Ａクラスが何か用？」←小山
見た目は大丈夫のようだ。そんなに似てるのだろうか？
「あなたたちのようなゴミが学校にあると思うと不愉快なの。」←秀吉
「なに!?」←小山
あれはホントに秀吉なんだろうか？俺の知ってる秀吉はあんなこと絶対に言わない。
「ちょっと頭が良いってだけで調子乗りすぎじゃないの。」←小山
「ゴミの分際で生意気だわ。ゴミはゴミのあるべき場所にあるべきだわ。面倒だけれど、近々、あなたたちゴミに宣戦布告するわ。ゴミはゴミらしく生きればいいのよ。じゃあね。」←秀吉
「みんな!!Ｆクラスなんかにかまってないで Ａクラスに宣戦布告するわよ!!」←小山

どうやらうまくいったようだ。それにしても秀吉、全然違和感なかったな。だてに演劇部のエースじゃないようだ。
「秀吉、お疲れ。」←吉井
「どうやらうまくいったようじゃ。」←秀吉
いつもの秀吉に戻っている。
「フッ、短気な代表で助かるぜ。」←坂本
「お前は相変わらず外道だな。」←俺
「まあな。それよりもう少しで俺たちの召喚戦争が始まる。教室に一旦戻るぞ。」←坂本

まあ昨日と同じで苦戦だ。
「よし、そろそろやるか。おー「雄二!!」←吉井
「なんだゴミ。戻ってくんな。死ぬまで戦え。」←坂本
おい、それは戦時中の日本と同じだぞ。それよりなぜ戻ってきた？
吉井は前線部隊の隊長のはずだ。
「そんなことより、あっ今姫路さんいないよね。」←吉井
見渡してみたがいない。どこいったんだろ？
「トイレじゃねいか？そんなことより要件を言え。」←坂本
「わかった。今回の召喚戦争から姫路さんをはずしてほしい。」←吉井
姫路を戦線から外す？一体何のつもりだ？
「姫路を戦線から外す？一体何のつもりだ！」←坂本
坂本が一字一句同じで言ってくれた。最後のビックリマークだけ違うが。
「それは言えない。けど外してほしい。あと根元くんの制服がほしい。」←吉井
「吉井、お前そんな趣味に…」←俺
「違うよ。僕はちゃんと女の子が好きだよ。お願いだよ雄二」←吉井
「チッ、仕方がねえ。お前がそこまで頼むんだったらよっぽどのことだろう。しかしその代わりお前が姫路の代わりをしろ」←坂本
「ありがとう、任せてよ」←吉井
「真田。念のためついていけ。」←坂本
「いいのか？俺がいったらどう闘うんだ？」←俺
「いやもうお前たち託した。俺たちは時間稼ぎでもしよう。」
「死ぬなよ。」←俺
「任せろ。おーい須川これを放送で…」←坂本
まあ大丈夫だろう。そんなことより
「吉井、行くぞ。」←俺
「分かったよ。」←吉井

というわけで俺たちはＣクラスにきている。なぜだって？吉井いうに
「ここの隣はＢクラスだからこの壁を破れば奇襲ができるよ。」←吉井
っと言うことらしい。しかもＣクラスはＡクラスと召喚戦争中だ。人はだれもいない。
「壁を破るっていったてコンクリートだぞ。」←俺
「あまいな昴君。僕の召喚獣は物理干渉を持ってるからね。」←吉井
ドヤ顔がうざい。確かに召喚獣は１点でも人間の１０倍から２０倍はあるらしい。
「真田君は、見張りをしといて。」←吉井
そんなとき、ついに例の作戦だ。
「全ＦＦＦ団員に告ぐ!!根本ははＣクラス代表小山と付き合っている!!この異端者を抹殺せよ。繰り返す全ＦＦＦ団員に告ぐ!!根本はＣクラス代表小山と付き合っている!!この異端者を抹殺せよ。」←放送（須川）
「「「殺せーーーーー」」」
「ゆるさん、彼女がいるなんて!!」←バカ
「絶対殺す。」←バカ
「敵はＢクラスにあり。」←バカ
ガサッ
「おい、吉井。どこ行くんだ。」←俺
「いやね、ちょっと用事を思い出して…」←吉井
間違いなく根元のところに行くんだろう。坂本が吉井について行かせた理由は逃がさないためだろう。ならその期待にこたえますか。
「お前の用事はこの壁を壊すことだ。」←俺
「けど、昴。根元君に彼女がいて悔しくないの。」←吉井
「なんで俺が赤の他人の恋愛に、首を突っ込まなきゃならないんだよ。

それより姫路がどうなってもいいのか？」←俺
「ど、どうしてそのことを⁉」←姫路
　こいつばれてないとでも、思ったのか？誰でも、お前の様子を見れば、姫路に何かあったのかって思うぞ。
「早く壁を壊すぞ。じゃないと根元の制服がゲットできないぞ。」←俺
「そうだね。根元君を殺したいけど、まずはこの壁を壊すことのするよ。」←吉井
　っと言い忘れたがちゃんとここには、立ち会いの教師がいる。
「なにブツブツ言ってるの？早く始めるから見張りよろしくね。遠藤先生召喚許可お願いします。」←吉井
「今回だけですからね。」←遠藤先生
　遠藤先生は生徒に甘い先生として有名だ。でなきゃこんな作戦できない。
「試験召喚獣サモン⁉」←吉井
　Ｆクラス　英語
　吉井　２４点
　相変わらず低いな。俺も見張りでもするか。

　ハロハロー。流離のコガラシだよ。今回から好きな武将を紹介するコーナーだよ。さて今回は、今作主人公、真田昴君の先祖、真田幸村だよ。「真田幸村」の名で広く知られているけどね、この頃の史料では「幸村」の名が使われているものは無く、実名においては「信繁」が正しいんだよ。幸村親子はね、徳川家康の野郎を何度も苦しめたすごい人なんだよ。大坂の陣では、豊臣がたについてね、特に冬の陣では真田丸と呼ばれる土作りの出城を作って、鉄砲隊を用いて、徳川勢に

大打撃を与えたんだよ。
　真田家の家紋である六文銭はね、冥銭を表しているといわれているんだよ。冥銭とは、、三途の川を渡るときの船の渡し賃なんだって。これから分かるように、幸村たちはいつ死んでも構わないという信念を持っていたんだね～。

１０話

問題　現代国語
次の（）に当てはまる語を書き、その四字熟語の意味を答えなさい。
一日千（）

姫路瑞希の答え
一日千（秋）
意味：非常に待ち遠しいことのたとえ。ある物事や、人が早く来てほしいと願う情が非常に強いこと。
教師のコメント
流石は姫路さんですね。

吉井明久の答え
一日千（円）
意味：一日千円は贅沢だ。（僕は一日百円）
教師のコメント
頑張って暮らしてください。

バカテストのネタがつきて、目の前がまっくらになった。

そして一方の廊下では…
「根元を殺せ――!!」←バカ

「異端者には死の鉄槌を!!」←バカ
「あいつら鬼の補習が怖くないのかよ。」←モブA
「っく、仕方がない、試験召喚獣サモン!!」←モブB
「「「「「「「「「「試験召喚獣サモン」」」」」」」」」」」
Fクラス　化学
バカたち30人ぐらい　平均　50点

Bクラス　化学
モブA～D　平均　250点

「邪魔するものは全員殺せ――!!」←バカ
「「「うわーーーー」」」

Bクラス　化学
モブA　0点
モブB　0点
モブC　0点
モブD　0点

「戦死者は補習!!」←鉄人

「鬼の補習は嫌だーー」←モブA
「死にたくないよ――」←モブB
抵抗するものもいれば、あきらめるものもいる。
「安心しろ。趣味は勉強。尊敬する人は二宮金次郎にしてやる。」←鉄人
「「ちっとも安心できネ――――」」」
「進むのだ、異端者に死の鉄槌を!!」←バカ
こうして戦死者は増えていくのであった…。

そして戻ってCクラスに…
ゴン、ガン、ゴン
「痛いよ、痛いよ。」←吉井
そりゃ痛いだろうな。召喚獣が殴ってるとはいえ、フィードバックが付いているのだから。
「我慢しろ。あと少しだ。それに姫路のためだろ。」←俺
「分かったよ…」←吉井
ガン、ゴン、ガン

そして一方の根元軍
ゴン、ガン、ゴン
「ったく、やかましいな。」←根本
「たぶん嫌がらせだと思うぞ。」←モブ

「こんなんで俺が乱れるとでも思ったか？」←根本
（思いっきり乱れてるじゃん）←モブ
「ん、なんか言ったか？」←根本
「いや、何も…（文句言ったら切れるもんなこいつ）」←モブ
「それよりどういうことだ。Ｂクラスの連中がＦクラスごときに死んで行くなんて。」←根本
「なんかＦクラスの連中は戦死を恐れてないらしいぞ。」←モブ
「なるほど。バカならではの作戦か。ったく、うっせーなー」←根本
ゴン、ガン、ゴン、ゴカァァ、ガラガラ
ついに壁が崩れた。
「やった。道が開けたよ。」←吉井
「奇襲は予想してたが、まさか壁を壊すとは…しかしこっちにはまだ人がいる。行けお前ら!!」←根本
まずい、いくら俺でも５人と相手するのはきつい。坂本たちは廊下でぎりぎりで踏ん張ってくれてる。
「「「「試験召喚獣サモン!!」」」」」←モブたち
仕方がないこうなったら
「吉井、戦うぞ。」←俺
「分かったよ」←吉井
「「試験召喚獣サモン!!」」←俺＆吉井

Ｂクラス　現代社会
モブ　Ｅ～Ｉ　平均２５０点

Ｆクラス　現代社会
真田　２９２点
吉井　３４点

吉井がうまいからといって戦力差に違いがありすぎる。このままでは負ける。

パリーーーン

窓を割ってはいって来たのは保健体育の教師の大島先生、それにムッツリーニだ。

「ムッツリーニ!?」←吉井

「根本は俺に殺らせろ。そっちは頼んだ。」←ムッツリーニ

いま根本の護衛は全員こっちに来ている。

「大島先生。召喚許可を。」←ムッツリーニ

「分かりました。召喚許可を出します。」←大島先生

「試験召喚獣サモン」←ムッツリーニ

「っくそ、試験召喚獣サモン」←根本

Bクラス　保健体育

根本　２４２点

Fクラス　保健体育

土屋　４４４点

「加速…」←ムッツリーニ

Bクラス　保健体育

根本　０点

「勝者Fクラス!!」←大島先生

「おーやっと終わったか。」←坂本

「坂本、何がお前らに託しただ。こんな秘密兵器隠しといて。」←俺

「あー悪い悪。」←坂本

結局俺たちも囮でしかないってわけが。

「Fクラスに負けるなんて…」↑根本
「条件を飲めば和平交渉してやってもいいぞ。」↑坂本
「「なんだって」」↑モブたち
「ああ、俺らの目標はAクラス1つ。だから今度Aクラスに戦う姿勢を見せてほしい。後、お前たちの代表に、これを着てくれればいいぞ。」↑坂本
　そういって取り出したのは、女子の制服だ。
「俺にこれを着ろだと。絶対y「「俺たちに任せろ。」」」↑Bクラスの人たち
　相当、嫌われていたようだ。やはり共通の敵を作るとまとまる。
「おい、ちょっと待てよ。」↑根本
「往生際が悪いな。さっさと着替えさせるぞ。」↑坂本
「手伝いましょうか。」↑モブW
「ああ、頼んだ。」↑坂本
「可愛くしてあげてね。」↑吉井
「無理。土台が腐ってるから。」↑モブW
「お前ら絶対、覚えとけよ。」↑根本
　女装姿で言われても全く迫力無いぞ。

「はい、姫路さん。」↑吉井
　そう言って根本の制服から手紙を出す。なるほどな。姫路はこれを取られていたのか。
「ありがとうございます。吉井君。」↑姫路
「別にいいんだよ。」↑吉井
　ビリビリ
「あっ。」↑吉井
「良いんです。こんなのに頼らなくても、自分で伝えますから。」↑姫路
「うまくいくといいね。」↑吉井
「はっ、はい。」↑姫路

吉井、そんなに残念がるな。姫路の好きなのはお前だ。ちなみに島田もお前のこと好きだぞ。って島田はどこ？
「島田はどこ行ったんだ？みんなで喜びを分かち合っているときに。」
↑俺
「美並はねなんか廊下で戦ってるときに、教室から木刀が飛んできてね。それにあたって今、補習中らしいよ。
うん、その木刀投げたの俺だ。

回想シーン

ムッツリーニが根本を打ち取るまで、時間を稼ぐか。まずはあいつから、
「とりゃあ!!」↑俺
ひゅん
あ、しまった木刀がすっぽ抜けた。
「きゃー」
まずい誰かにあたちゃったな。やっぱり鉄人にお願いして召喚獣の練習するか。
「勝者Fクラス!!」↑大島先生
おっ、ムッツリーニ勝ったのか。さすがは寡黙なる性識者。保健体育だけは強い。

回想シーン終了

あーあの時当たったのって島田だったか。悪いことしたな―。けどばれたら殴られそうだから黙っとくか。

一方その頃の補習室
「何で木刀が飛んでくるのよ。あれさえなかったらウチだって…。

あー古文難しい。」←島田
「お姉様～教えて差し上げますは。」←清水
「ありがとって美春!?なんであんたがここにいるのよ!!」←島田
「特別に入れてもらい、お姉様の小さな胸を狙う豚どもから、守りに来ましたわ～。さあ保健体育の実技をしましょう。そして元気な男の子を生みましょう。」←清水
「ウチとあんたでは、子どもは産めないのよ―。」←島田
「愛さえあれば関係ありませんは～」←清水
「いやーーーー」←島田
「お前らうるさいぞ。補習2時間追加!!」←鉄人
「なんでこうなるの―」←島田

こうして俺たちはBクラスに勝ったのであった。

はろはろ、流離のコガラシだよ。さーて今週の武将紹介は。三国志から、曹操さんだよー。曹操さんはね後漢の丞相・魏王で、三国時代の魏の基礎を作ったすごい人なんだよ。日本では悪役扱いだけど、中国では英雄とまで言われて人気あるんだよ。しかもこの人、戦ではほ

とんど負けなしなんだよ。あの呂布にも勝ったんだよ!!なんかね奇襲・伏兵を用いた戦いを得意らしい。最終的には中国北部全域を支配するまでに勢力を拡大しているんだよ。しかもこの曹操さん戦だけじゃなく政治や詩人なんかでも有名なんだよ。流石は乱世の英雄だね～。

11話

問題（国語）
次の漢字を読みなさい。
馬鹿

姫路瑞樹の解答
ばか
教師のコメント
姫路さんとは正反対のことですね。

吉井明久の解答
うましか
教師のコメント
あなたのことです。

坂本雄二の解答
よしいあきひさ
教師のコメント
・・・

そしてAクラス戦が始まった。えっ？いきなりなんだって。回想シーンをくれだって？分かった。

回想シーン

「よし、いよいよ今日はAクラスに、試験召喚戦争を挑む。これで俺たちもシステムデスクだ。」←坂本

時間としては一週間だか、色々ありすぎて長かったな。

「まずはAクラスに宣戦布告してくるぞ。」←坂本

「雄二。今度こそヤダからね。」←吉井

「当り前だ。誰がお前なんかに頼むか。お前みたいな脳なしに、頼んだら勝てるもんも勝てるか。」←坂本

「そういうことだ吉井。お前がいると作戦に支障をきたす。留守番でもしとくんだな。」←俺

吉井がいたら作戦がばれるかもしれない。

「もうみんな嫌い!!」←吉井

「ほっといて行くぞ。」←坂本

「ちょっと待ってよー。誰も慰めてくれないのー。」←吉井

向こうの交渉相手は木下優子だ。双子でも普通ここまで似てるか？秀吉が女子の制服着れば、全く分からんぞ。

「Cクラス戦お疲れさまよ。」←坂本

「ふん、あんなのAクラスにとって敵じゃないわ。」←木下

「流石はAクラス様ってわけか。」←坂本

「そんなことより、さっさと用件言いなさいよ。」←木下

「ああそうだな。俺たちFクラスはAクラスに召喚戦争を申し込む。」←坂本

あらかじめ分かっているから、動揺はしない。ていうか、性格が全然秀吉と違うな。秀吉は穏やかだが、木下はツンツンしている。

「召喚戦争は7対7で申し込みたい。」←坂本
「ダメに決まってるじゃない。Aクラスが Fクラスに負けることは絶対にないけど、万が一って言うのがあるから。」←木下
　木下も交渉としてきている訳だから、下手な交渉はできない。
「俺たちはDクラスともBクラスとも和平で試験召喚戦争を終わらしている。しかもその二つともAクラスをねらっているんだぞ。これからのことも考えてるんだぜ。」←坂本
「でも…」←木下
「それでいい。雄二の言うとおり7対7でいい。」
　おっ、やっとAクラス代表のお出ましか。このAクラス代表霧島翔子は噂では、男子に興味がなく、姫路のことが好きらしい、あくまで噂だけど…
「代表!?」←木下
「雄二、条件はそれでいい。その代わり勝った方の言うことを、何でも一つ聞くならいい。」←霧島
「分かったそれでいいぞ。」←坂本
「ちょっと待ってよ。姫路さんの許可を得てから…。ムッツリーニ、準備はまだ早いよ。」←吉井
「ボタボタ、、カメラの準備、完璧…」←ムッツリーニ
　相変わらずエロに関しては早いな。鼻血が出るのもそうだけど。
「ムッツリーニ、負ける気満々じゃないか。…うまく取れたら頂戴ね…」←吉井
「吉井、何気に頼んでるぞ。」←俺
「お前ら何言ってんだ？まあいい、今日の2時からスタートな。」←坂本
「分かった…」←翔子

「坂本、7対7なら誰が出るんだ。」←俺
「俺にお前それに姫路にムッツリーニは決定だ。」←坂本
「仮に俺と姫路とムッツリーニが勝てたとしよう。あと一勝はどうす

るんだ。それに何で5対5にしなかった？」←俺
「5対5にしなかったのは作品の都合だ。深追いしてはいけない。」←坂本
何言ってんだ。作品の都合って？深追い禁止ってどういうことだ。
「それに後一勝は俺が取る。」←坂本
「あれ、お前って何か特別すごいのってあったっけ？」←俺
俺が知ってる限り無いはずだ。
「そんなのはない。だが翔子への必勝法はある。」←坂本
「霧島への必勝法？」←俺
「ああそうだ。あいつはあの問題が出れば確実に間違う。」←坂本
「その問題ってなんなんじゃ。」←秀吉
「大化の改新だ。」←坂本
「大化の改新じゃと？中臣鎌足と中大兄皇子と言うことかの？」←秀吉
「いやもっと簡単だ。」←坂本
「じゃあ６４５年に起きたとかか？」←俺
「正解だ。この問題が出れば確実にあいつは間違える。」←坂本
「なんでなんじゃ？」←秀吉
確かにそうだ。学年一位で覚えたことは、絶対に忘れないとまで言われるのにどうして…
「昔、俺が翔子に間違えて教えてしまって。」←坂本
なるほど分かった。
「坂本、お前、霧島とはどんな関係なんだ。名前で呼び合っていたが。」←俺
「ああ、ただの幼馴染だ。」←坂本
「全員構え!!」←吉井
ガサッ
何で全員、坂本に向けてスリッパを向けている。ああ、分かったそういうことか。幼馴染が妬ましいだけか。
「雄二、一人だけ抜け駆けして、死の鉄槌を加えなきゃいけないね。」←吉井

ったく幼馴染がいるだけで殺されなきゃいけないのかこのクラスは。

「全員放てー」←吉井

「「「「「「死ねーーーーーーーー」」」」」」

流離のコガラシだよ。今日も三国志からで呂布だよ。呂布はねー三国志最強の男らしいよ。なんかね数十人と戦ったり、素手で戦ったり、チートな人らしいよ。しかもこの人時代がそうさせたとはいえ、裏切る人だったんだよ。董卓を裏切り切り捨て、劉備の元に身を寄せつつもその劉備も裏切ったんだよ。けどこの呂布男らしくて魅力的でね、最近は三国志の魅力を高める一人になってるらしいよ〜。「人中に呂布あり、馬中に赤兎あり」、と言われてることからも最強の男にふさわしいよねー。

１２話

問題　世界史
（）に当てはまる語を書きなさい。
１４９２年アメリカ大陸を発見した人は（　）である。

姫路瑞希の答え
コロンブス
教師のコメント
簡単ですね。

真田昴の答え
クリストファー・コロンブス　（補足：しかし現代の多文化主義論者たちは、「〝発見〟などしていない」との見解で一致している。）
教師のコメント
まちがってませんが、補足は要りませんので。

吉井明久の答え
りっぱ
教師のコメント
確かにりっぱですが…

２時になった。
「今からＡクラス対Ｆクラスの試験召喚戦争を始めます。」
そういうのは学年主任の高橋先生。通称高橋女史だ。簡単に説明するとキャリアウーマン然とした人だ。
「両者前に出てください。」←高橋先生
「真田、頼んだぞ。」←坂本
「任せとけ。人中に呂布と呼ばれた男に敵はいない。」←俺
「こっちは私が行くわ。」←木下
木下優子か。こいつは秀吉と違い学年の５本の指に入る。相手にとって不足はなしか。
「日本史でお願いします。」←俺
良いことにこっちは科目選択権を４回もらっている。
「えっ…、数学じゃないの？」←吉井
「吉井、俺は数学もできるがそれよりも歴史が得意だ。」←俺
「真田がこういうんだ。こいつに任せるしかない。」←坂本
「歴史が得意なの…。けど残念だったわね。先に行っておくけど、私、日本史も３００点越えてるわ。ＡクラスとＦクラスの差を見せて上げるわ。試験召喚獣サモン!!」←木下

Ａクラス　日本史
木下　３２１点

「うわー何あの点数。」←吉井
「ワシらと全然違うのじゃ。」←秀吉
「どう、ビビって出せないのかしら。なら私の勝ちね。」←木下
「Ａクラスってこんなもんなのか。」←俺
「いつまでその強がりが続くのかしら。」←木下
「分かったよ、見せてやる。試験召喚獣サモン!!」←俺

Ｆクラス　日本史
真田　４８５点

「「「４８５点」」」
「何よあんな点数⁉」←木下
「僕の合計点ぐらいだよ。」←吉井
「すごいのじゃ。これなら姉上に勝てるのじゃ。」←秀吉
「ったくそれぐらい俺に先に教えろよ。」←坂本
「悪い悪い、びっくりさせたくて。」←俺
「けど召喚獣の扱いは私の方が上のはず。」←木下
　そう言うといきなり突っ込んできた。おいおい性格が完全に出てるぜ。ひょいっとな
「よけられた⁉」←木下
「当たり前だろ、あんな単調な攻撃。」←俺
「単調な攻撃ですって、ならこれなら…」←木下
　ひょいっとな
「またよけられた。私の方が召喚獣操作に慣れてるはずなのに…」←木下
「ひとつ勘違いしてないか、木下。お前よりも俺の方が召喚獣操作、うまいと思うぞ。」←俺
「なんですって‼」←木下
「俺なここ最近、帰りに鉄人に頼んで召喚獣の操作の練習やったんだよ。こんなように。」←俺
　グサッ

Ａクラス　日本史
木下　２７８点

　あーやっぱりこの点数差でもダメージ少ないな。流石木刀。
「しかしダメージは少ないわ」←木下

「ならこれはどうだ。アウェイン。」↑俺
「そっ、それは⁉」↑木下
そうこれは腕輪能力、４００点以上の時だけ使えるものだ。ちなみに４００点以上はＡクラスでも使えるのは指折りだ。
二刀流の木刀を前でクロスさせ攻撃する。
「旋風斬‼」↑俺

Ａクラス　日本史
木下　１８２点

「まだ点数は残ってるわ」↑木下
「そいつは無理だぜ。かまいたち‼」↑俺

Ａクラス　日本史
木下　８５点

「そしてもう一撃‼」↑俺

Ａクラス　日本史
木下　０点

「一回戦勝者、Ｆクラス‼」↑高橋先生

「何よ。今の…。」↑木下
「それは旋風斬でできた２つのかまいたちだ。これを成功させるのに苦労した。」↑俺
「そんなことよりご苦労だった。」↑坂本
「お前から感謝の言葉がもらえるなんてな。てっきり勝って当然だなんて言うかと思ったぜ。」↑坂本
「勝つのは前提だか正直、危険なかけだった。しかし今はこっちに風は向きつつある。」↑坂本

「次の人、準備してください。」←高橋先生
「読んでるぜ次は誰がいくんだ？」←俺
「モブＡです。数学でお願いします。」←モブＡ
「ここはウチに任せて。数学ならＢクラス並みだから。」←島田
「頼んだぞ。」←坂本
「島田美並です。お願いします。」←島田

「お前、全く期待してないだろ。」←俺
「当たり前だろ、わざわざ数学選んできたってことは、Ａクラスでもトップクラスだろう。Ｂクラスレベルで勝てる相手じゃない。」←坂本
「確かにそうだか、応援ぐらいしてやれよ。」←俺
「それぐらいはするつもりだ。」←坂本

「二人とも出してください。」←高橋先生
「私、数学はＢクラス並みだから」←島田
「貧乳には興味ない。早く始めましょう。」←モブＡ
「「試験召喚獣サモン!!」」

Ａクラス　数学
モブＡ　４０１点

Ｆクラス　数学
島田　２７５点

「僕は勿論、Ａクラス並みだから。アウェイン!!」←モブＡ
ヒュッ　グサッ

Ｆクラス　数学
島田　０点
「２回戦、勝者Ａクラス!!」←高橋先生

「・・・」↑島田
「ドンマイ。」↑俺
「大丈夫だよ、美並。もともと負ける予定だったんだから。」↑吉井
「それってどういう事なのよ!!」↑島田
「美並、関節はそっちにはまがが gいたいいたいいたい。」↑吉井
いつもの調子に戻ったようだ。
「次は誰にするんだ？」↑俺
「私が行きます。」↑姫路
「んじゃ姫路でいいぞ。」↑坂本
「ありがとうございます。」↑姫路
「次の人来てください。」↑姫路
「頑張れよ。」↑俺
「はい!!」↑姫路

「Aクラス次席の久保利光です。科目は総合科目でお願いします。」↑久保
「ずるいのじゃ、今回はこっちじゃぞ。」↑秀吉
「いいですよ木下君。Fクラス、姫路瑞希です。よろしくお願いします。」↑姫路
久保利光、Aクラスナンバー2。一部のあいだでは吉井のことが好きな、同性愛者と言われている。
「「試験召喚獣サモン!!」」

Aクラス　総合科目
久保　３６７１点

Fクラス　総合科目
姫路　３８４７点

「っく、姫路さんいつの間にそんなに…。」↑久保
「私、このクラスが好きです。たまにバカなことしちゃうことあって

も、みんな優しくて良い人たちです。みんなでもっと楽しみたいです。だから、アウェイン!!」
「なんだ!?」←久保
「私は頑張れるんです。」←姫路

Aクラス　総合科目
久保　0点

「三回戦、勝者Fクラス!!」←高橋先生

流離のコガラシだよ。今日は伊達政宗について紹介するよ。伊達政宗といえば「独眼竜」だよね。政宗がちっちゃかった頃、天然痘って言うね病気でね失明しちゃたんだよ。そのあとね隻眼となったことから、こう呼ばれるようになったんだって。この独眼竜は中二…じゃなかったカッコいいけど、この言葉が付けられたのは明治時代になってからで、だから明治時代の人も中二…じゃなかったカッコいい言葉を考える人がいたんだね。

13話

問題　保健体育
テニスでQ：2対2で行う試合をダブルスといいます。では1対1はなんというでしょう

姫路瑞希の答え
シングルス
教師のコメント
流石ですね。

坂本雄二の答え
決闘
教師のコメント
後で職員室に来てください。

吉井明久の答え
デスマッチ
教師のコメント
・・・後で坂本君と職員室に来てください。

「瑞希、お疲れ様。」←島田
「よくやった。」←坂本
「いえいえ私なんて全然…。」←姫路
「姫路、今まで気づかなくてごめんな。」←バカ
「姫路がそんなに俺たちのことが好きだったなんて。」←バカ
「いえっ、そんなつもりで言ったんじゃ無くて…」←姫路
「姫路、こいつらに何言っても無駄だ。あきらめろ。」←俺
　ったく姫路もあんな風に言ったら、あのバカたちが誤解することぐらい分かってほしいな。
「姫路さん、デートに行きましょう。」←バカ
「そんなことより、ホテル予約しときましたんで。」←バカ
　あのバカたちまだやってるのか。

「次は誰を犠牲にするんだ。」←俺
「っふついに来たぜ。あいつを使う番が。明久!!」←坂本
「何？」←吉井
「次はお前で行くぞ。」←坂本
「えっ…どうして僕が？」←吉井
「この役にお前ほど適してるのはいない。」←坂本
　犠牲にだろ、流石に今までの経験上だまさ…
「分かったよ。姫路さんも頑張ったし僕も頑張るよ。」←吉井
　…れました。吉井、ホントバカだな。さすがにこの坂本が適してるとか言ってるんだから、犠牲以外ないだろ。
「次の人来てください。」←高橋先生
「行ってくるよ。」←吉井
「お大事にな…」←俺

「???」←吉井

「モブBです。科目は英語でお願いします。」←モブB
「吉井明久だよ。遂に本気を出す時が来たね。」←吉井
「明久!!お前の本気を見せてやれ。」←坂本
吉井ってすごいのか?そんな声が聞こえてくるがまず間違いなく出まかせだろう。
「本気を出したところで勝つ!!試験召喚獣サモン!!」←モブB

Aクラス　英語
モブB　389点

「じゃあ僕の本気を見せてあげるよ。試験召喚獣サモン!!実は僕、左利きなんだ。」←吉井
グサッ
「いたーい、何これ、足がもげるーーーーーギャー」←吉井
「テストに利き腕は関係ないでしょー」←島田

Fクラス　英語
吉井　0点

フィードバックもそうとうだろうな。それより点数が出される前に終わるなんて。
「4回戦、勝者Aクラス!!」←高橋先生
「予想通りだ。実に気分がいい。」←坂本
「雄二!!僕への期待はどうした。」←吉井
「期待?誰がお前に期待する。」←坂本
「ムッキーッ、昴はちょっと期待したよね?」←吉井
「微塵も期待してないぜ。」←俺
「もうみんな嫌い!!」←吉井

「次の人来てください。」←高橋先生
「ムッツリーニお前の番だ。任せたぞ。」←坂本
「了解…保健体育でお願いします…」←ムッツリーニ
「工藤愛子でーす。Ｂ７８・Ｗ５６・Ｈ７９です。土屋君君も保健体育そうとうらしいけど、僕は実践派だからね。知識よりも実技の方が強いって見せて上げるよ。試験召喚獣サモン!!」←工藤

Ａクラス　保健体育
工藤　４５２点

「試験召喚獣サモン…」←ムッツリーニ
「ボクの勝ちだね。ムッツリーニ君」←工藤
「加速…」←ムッツリーニ
ヒュッ
「加速終了…」←ムッツリーニ

Ａクラス　保健体育
工藤　０点

今何が起きた!?ムッツリーニの召喚獣が消えたと思ったら工藤の点数が…それよりムッツリーニのあの点数なんだ!?

Ｆクラス　保健体育
土屋　５６８点

「「「「「５６８点!?」」」」」
「今起きたの何よ!?」←木下
「一瞬消えたよな。」←モブＡ
「ムッツリーニ、よくやった。」←坂本
「５回戦、勝者Ｆクラス。」←高橋先生

「このボクが保健体育で負けるなんて…」↑工藤
　５６８点とか俺の歴史でもとれないと思うぞ。まあそれよりこれであと一勝だ。

「次はどうするんだ？」↑俺
「次？だれでもいいぜ。須川行って来い。」↑坂本
「な、なぜ俺が行かなきゃいけないんだ。」↑須川
「じゃっ武藤行って来い。」↑坂本
「そんなわざわざ負けに行くなんて、恥さらしはヤダぜ。」↑武藤
　負けると分かっているだけ、吉井よりは良いと思うがこれなら
「お前らよく考えろ。相手はＡクラスだがここでお前たちが勝てばどうなる？明日からシステムデスクにさらに勝利した奴は明日からモテモテだぞ。」↑俺
　ピクッ
「仕方がないここは人中に呂布と呼ばれた俺が…」↑バカ
　俺のをパクるな。
「まてここは平成の真田幸村と呼ばれた俺が…」↑バカ
　それは、俺の先祖だ。
「まっ、待てここは平成の…」↑バカ
　モテモテの言葉に反応しすぎだろお前ら。ひとつ言っておくがお前らが勝っても絶対もてないからな。

「次の人来てください。」↑高橋先生
「「「「「俺が行こう。」」」」」
「もういいじゃんけんで決めろ。」↑俺
「「「「「じゃんけんポい」」」」」
「「「「「あいこでしょ」」」」」
　普通に考えて決まらないだろその人数じゃ、けどみんなパーって頭もパーってことか。
「「「「「あいこでしょ」」」」」

「やったー。これで今日からモテモテだ。」←須川
どうやら須川が勝ったようだ。しかし須川、お前じゃ絶対にモテないぞ。
「俺は須川涼・ＦＦＦ団の会長だ。お前に勝って俺はモテモテになる!!」←須川
「へえ、私に勝とうって？私はモブＣ。あんたに悪いけど負けるつもりはないから。あとあんたじゃ絶対にモテてないよ。」←モブＣ
「なっ、何を言うんだ。絶対に俺が勝ってモテてやる!!」←須川
「好きにすれば。化学でお願いします。試験召喚獣サモン!!」←モブＣ

Ａクラス　化学
モブＣ　３９９点

「おい、武藤。仕方ない。お前に代わってやる。よくよく考えれば俺はモテモテだった。」←須川
「いや、俺もやっぱりいいよ。」←武藤
「じゃあ…」←須川
「「会長お願いします。」」
「ＦＦＦ団会長の力を見せてください。」←バカ
「そうです。お願いします。」←バカ
こいつら、相手の点数見て現実を思い知ったようだ。まあせいぜい死んでくれ。
「っち、チクショー。やってやるよ!!試験召喚獣サモン!!」←須川
スパっ

Ｆクラス　化学
須川　０点

予想通り瞬殺だな。吉井並みの死にかただったぞ。しかしこれで３対３．後は坂本に託そう。

流離のコガラシだよ。今日は直江兼続を紹介しちゃうぞー。兼続はね、頭が良く武芸に優れ、文武両道今でいう優等生って感じだよ。しかも政治面でも軍事面でも活躍してたんだよー。しかも!!長身で立派な体格をしていて、眉目秀麗、弁舌巧みで明朗、という容姿までかんぺきだったらしいよ。なんだこのパーフェクトな人!!兼続はほかにも〝愛〟って字でかたどって、兜に付けてたので有名だよねー。けど愛というのがＬＯＶＥの方じゃないことを願うよ…

１４話　第一次試験召喚戦争編　閉幕

問題　英語
次の単語を訳しなさい。
ａｌｉｅｎ

姫路瑞希の答え
異星人
教師のコメント
簡単ですね。

土屋康太の答え
アリエン
教師のコメント
確かにありえないかもしれないけど…

吉井明久
！（〃（，(〃％％（！
教師のコメント
異星人っているんですね。

「坂本、頼んだぞ。」↑俺
「ああ、任せろ。ここまでしてくれたことに感謝するぞ。」↑坂本
「頑張るのじゃぞ。」↑秀吉
「お願いします。」↑姫路
「後は任せた…」↑ムッツリーニ
「ああ、任せろ。」↑坂本

「次の人来てください。」↑高橋先生
「私はAクラス代表、霧島翔子。」↑霧島
「俺はFクラス代表、坂本雄二だ。科目は日本史。小学校レベルの100点満点のペーパーテストだ。」↑坂本
　何言ってんだなどの声がAクラスから聞こえてくる。まあこれが勝つための唯一の方法だ。
「分かりました。では二人は付いてきてください。」↑高橋先生
　テストは視聴覚室でやるようだ。向こうの様子はカメラを通して分かる。
「では、始めてください。」↑高橋先生

　問題　日本史
（）内に当てはまる年号を書きなさい。

①（　）年に源頼朝は鎌倉幕府を開いた。

②（　）年に遣唐使を廃止した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

⑧（　）年に大化の改新が始まった。

よし勝った。これでボロイFクラスは終わりだ。

〜〜

「結果を発表します。Aクラス霧島翔子　９９点」↑高橋先生
まっ、まさか、俺達が負けるなんて、そんな声が聞こえてくる。
「やったこれで俺たちもシステムデスクだ。」↑バカ
「これでモテモテだ!!」↑バカ
「ホテルの予約しとかなきゃ。」↑バカ
安心しろ。お前らはモテないし、ホテルの予約も無駄だ。

「Fクラス坂本雄二　５４点」↑高橋先生
「「「「ほぇ？」」」」
「雄二、どういうことだ。」↑吉井
「おい、お前…小学校レベルで５４点かよ。」↑俺
「すまん。思ったよりも難しかった。」↑坂本
「何が思ったよりも難しかっただよ。この糞ゴリラ。」↑吉井
お前だって別に勝ってないだろ…
「あーこれで俺達のモテモテライフが…」↑バカ
「っち、こんなことなら俺が行くべきだった。」↑バカ
いやお前らは結局モテないし、お前が行っても結果は変わらないと思うぞ。て言うかFクラスのレベルはこんなもんだったか。やっぱりな。今頃だがまた振り分け試験、寝坊したことを後悔するぜ。

「雄二、約束覚えてるよね。」↑霧島
おっとそうだった。そういやそんなことがあったたな。
「約束？負けた方が言うこと聴くだろ。」↑坂本
「雄二、それは姫路さんに許可取ってから…ムッツリーニ撮影の準備早いよ。…一枚買うよ…」↑吉井

「ボタボタ。カメラの準備よし。光かげんよし…」↑ムッツリーニ
「何気に頼むな。」↑俺
しかし霧島はなにを頼むんだろう？
「雄二、私と付き合って。」↑霧島
・・・
「全員構え!!!」↑吉井
ザッ
「お前ら一旦スリッパを下せ。翔子、お前まだあきらめて無かったのか。」↑坂本
あれ？坂本はこの展開を予想してたのか？
「うん…」↑霧島
「ったくあれはお前の勘違いだろ。」↑坂本
「でも約束は約束。雄二は私と付き合う。」↑霧島
ブチッ
おや吉井から何か音がしたぞ
「雄二!!負けたくせに一人だけ良い目に!!全員放てー」↑吉井
「「「死ねーーーー」」」

その後のFクラス。

スリッパを放った後、坂本は霧島にこれからデートということで、なぜか手錠につながれていた。霧島が言うに、「雄二は照れ屋だから。」らしい。
「っく、クソ、雄二め。」↑吉井
「戦死者は補習!!」↑鉄人
「「えっ？」」

そして補習室にて

「真田君ね。今度こそ負けないから。」↑木下

「ムッツリーニ君か。ふっ面白いね。今度こそ負けないよ。」↑工藤

「っく雄二め。悠々とデートなんて。」↑吉井

「吉井君、教えてあげようか？」↑久保

「久保君、いいの？ありがとう。」↑吉井

「礼を言いたいのは僕の方だよ。　吉井君と一緒に勉強できるて。」↑久保

「???」↑吉井

「あーもう何で負けちゃうのよ。」↑島田

「お姉様。豚野郎のことは忘れてしまいましょう。」↑清水

「それもそうね…って美春⁉なんであんたがここにいるのよ‼」↑島田

「お姉様が補習と聞いて入れてもらいました。さあ保健体育の実技をしましょう。そして元気な女の子を産みましょう。」↑清水

「美春、何度も言うけどウチと美春じゃ、子どもは産めないのよ‼」↑島田

「愛さえあれば関係ありませんわー。」↑清水

「ウチと美春に愛なんてなーい‼」↑島田

「お前らうるさいぞ。補習2時間追加‼」↑鉄人

「何でいつもこうなのーー」↑島田

「お姉様とならへっちゃらですわーー」↑清水

はろはろ流離のコガラシだよ。今日は雑賀孫一さんだよ。雑賀孫一はね雑賀衆の頭領なんだよ。この雑賀衆っていうのはね当時珍しかった鉄砲を、ふんだんに使い高い技術を、持った人たちだよ。でねこの雑賀孫一さんはね織田信長が台頭してくると信長勢を苦しめ、豊臣秀吉が台頭してくると秀吉を、関ヶ原の戦いでは西軍にっと必ず敵の方にいるんだよ。けどね雑賀孫一って不明な点が多いらしいよ。その原因の一つに〝孫一〟って言うのを複数で使う通し名だったらしいよ。だけどこういうふうに敵の方にいて、有名な武将を苦しめた人って応援してあげたくなっちゃうね。

１５話　バカと俺と危険な休日

質問
ナンパされている人がいて、その人が嫌がってるときあなたはどうしますか。

真田昴の答え
その人の彼氏のふりして「待った―？」とか言ってその場から一緒に立ち去る。
教師のコメント
なるほど。うまい方法ですね。

土屋康太の答え
ナンパした奴に死の鉄槌を。

吉井明久の答え
ナンパした奴に死の鉄槌を加え、その女の子をナンパする

須川涼の答え
ナンパした奴に死の鉄槌を加え、その女の子をナンパする

武藤モブ太の答え
ナンパした奴に死の鉄槌を加え、その女の子をナンパする

教師のコメント
学校外の人に迷惑をかけないで下さい。

召喚戦争も終わり休日だ。忙しかったニ週間だったな。今日はバカどもに遭わなくて済むから平和に過ごせるな…
「ちょっとそこの姉ちゃん。俺らと一緒に遊ばない。」
「え…あっその…。」←木下
おっあれは秀吉？いやスカート履いてるから木下の方か。たぶんナンパされてるのだろう。知り合いじゃなかったら助けないかもしれないが一応知ってるし、それに困ってるぽいしな。いっちょ助けてやりますか。

「木下。待った？」←俺
「真田君!!…えっ…あっ、うん遅いよー」←木下
木下も俺の意図をさっしてくれたようだ。これなら…
「木下。この人たち知り合い？」←俺
「違うわよ。話しかけられただけよ。」←木下
「じゃいいね。これから遊びに行くんでそれでは～」←俺
よしこの調子でここから離れれば…
「おい、ちょっと待ち―」←モヒカン
チッ、なんだばれたか？
「俺らこの姉ちゃんと今から遊ぶわけ、だからどっか行ってくれない。」←モヒカン
「何言ってんのよ。何であんたたちとなんか遊ばないといけないわけ。」←木下

「こう言ってるが？」←俺
「俺らと遊ぶの。お前ら連れて行け。」←モヒカン
「ＯＫっす」」←モブ

「いやっ、やめて。」←木下
「お前ら恥ずかしくないのか。こんな可愛い女の子をそんなふうにして。」←俺
「っふ、お前は見逃してやろうと思ったが、そんなふうに言われるんじゃな―。お前ら俺達の力を見せてやれ」←モヒカン
「ＯＫっす」」←モブ
　ったくやれやれ。どうしてすぐ暴力になるのか。俺の平和な休日はどうしたんだよ。まあ良かったはＦクラスがあんなんだから、念のため木刀持っといて。
「背中から木刀!?だったらこっちも使わせてもらうぜ。」←モブ
　ナイフか～。けどそういうのって
「負けフラグって知ってる？」←俺
「なんだ言いわけか？いまから土下座して、許してくださいって言えばお前は許してやってもいいぜ。」←モブ
　ったくまた負けフラグをつくってやがる。
「主人公なそういうふうに来る悪役ってな負けるんだよ。知らない？」←俺
「なんだと貴様。強がりやがって…これでもどうだ。オリャー」←モブ
　ひょいっやっと
「痛ってえ。」←モブ
「弱すぎって話にならない。剣道６段をなめってもらちゃ困るな。」←俺
「チッ、オメーラ行くぞ。」←モヒカン
「ＯＫ―っす」」←モブ

　ふう去ってくれてよかった。

「ありがとう。お礼をするわ。」←木下
「いやべついいよ。これぐらい。」←俺
「いや、お礼しないと私がなんだか行けない気がして。」←木下
「そう？じゃあお言葉に甘えて。」←俺

という訳で、喫茶店にいる。紅茶とアップルパイをおごってもらっている。
「さっきあんなところで、可愛いとか言わないでよね。」←木下
さっき？ああ、あのときか。
「いや別に本当のこと言っただけだから問題ないだろ。実際可愛いし。」←俺
「可愛いって…けど秀吉の方が可愛いでしょ？」←木下
「どっちも可愛いと思うぞ。人はそれぞれ違うからな。秀吉は秀吉でお前はお前でいいと思うぞ。しかも秀吉は男だからな。好きになるんだったらお前の方だと思うぞ。」←俺
「すっ、好きになるほうって…（テレテレ）」←木下
どうして赤くなってるんだ？俺変なこと言ったっけ？まあいいや。
それより
「秀吉には助かってるな。」←俺
「助かってるって？（テレテレ）」←木下
「秀吉はＦクラス、俺除くと唯一まともだからな。」←俺
「確かにそうわね。けど秀吉、〝ワシ〟とか一人称で使ってるのよ。（テレテレ）」←木下
「けどそれぐらいならましな方だぞ。」←俺
「それぐらいがましな方って、Ｆクラスはすごいのね。（テレテレ）」←木下
「ああ吉井を筆頭として、坂本、ムッツリーニ、ＦＦＦ団、それに姫路に島田だ。」←俺
「姫路さんや島田さんもなの？（テレテレ）」←木下

「ああ、姫路に料理を作らせれば、天下一品の破壊力だし、島田は吉井の関節曲げてるし。」←俺
　ちなみに俺は姫路の料理を一回しかたべてない。
「たいへんなのね。なんで頭いいのに真田君Ｆクラスなの？（テレテレ）」←木下
「あっああそれはだな、ちょっとな。」←俺
「ちょっと何よ（テレテレ）」←木下
「それはだな振り分け試験のときにな、寝坊しちゃってな…」←俺
「寝坊!?真田君でもそういうことあるんだね。（テレテレ）」←木下
「仕方ないだろ。朝苦手なんだから。それよりお前さっきから顔赤いぞ。熱でもあるんじゃないか？」←俺
「ちっ違うわよ！別に真田君と話していて楽しいからとか、好きになるならお前の方だ。とか言われたからじゃ絶対無いからね。ちょっと暑いだけよ。（テレテレ）」←木下
　あまりの早口でほとんど聞こえなかったぞ。
「とりあえず大丈夫ってことだな。」←俺

「あっ、あれは真田に木下優子!!抜け駆けしたな。」←バカ
　モヒカンの次はＦクラスのバカか。
「木下。とりあえず逃げるぞ。」←俺
「分かったわ。あっお金お願いします。」←木下

「逃げ切れたか？」←俺
「見つけたぞ、真田!!」←バカ
　流石ＦＦＦ団の会員だけはある。執念だけは人一倍か。
「さあ優子さんこっちくるんだ。」←バカ
「なんであんたの方に行かなきゃいけないといけないのよ。下の名前で呼ばれたくないし。」←木下
「仕方ないここは真田を倒し…」
　ゴスッ　ドカ
「ふう、片付いた。」←俺

「ありがとね、一度だけじゃなくニ度も助けてくれてありがとね。（テレテレ）」↑木下
「いや別に今回は俺に対する恨みだったし。」↑俺
「けどFクラスってホントクズね。真田君とは大違いね。（テレテレ）」↑木下
「じゃあもうそろそろ帰るかな。」↑俺
「えっもう帰るの。」↑木下
「ああ、お礼もしてもらったし、これ以上悪いだろ。」↑俺
「悪いなんて…まあ予定とかあるよね。じゃあ、じゃあねー。」↑木下
「あっちょっち待ち。携帯貸して。」↑俺
「えっ…あっいいわよ。はい」↑木下
カチャカチャ
「はい、俺のメアドいれておいたから。」↑俺
「えっ…ありがとう。（テレテレ）」↑木下
「じゃこれで、じゃあねー」↑俺
「じゃっ、じゃあねー。（テレテレ）」↑木下

その後の木下優子
「ただいま。」↑木下
「お帰りなのじゃ。」↑秀吉
「秀吉、真田君ってどう人？」↑木下
「真田じゃと、真田は歴史好きで頭が良くて、前の召喚戦争も、真田と

雄二の作戦でもあるんじゃよ。それよりどうして真田のことを知りたいのじゃ。まさか薄い本の妄想に…姉上関節はそっちに曲らんのじゃ。」←秀吉
「秀吉、それ以上言ったら殺すわよ。そんなんじゃなくてただ今日、ナンパされたときに助けてくれたのよ。」←木下
「真田がじゃと。ワシからもお礼を言っておくのじゃ。」←秀吉

(真田君は私のほうが秀吉よりいいっていってくれた。こんなの初めて。いつも秀吉と私だと、秀吉の方ばっかに人気があった。真田君といると心がポカポカする感じ。こんな感覚初めて、これって私、真田君のこと好きってこと?分かんない。あっ、そういえばメアド登録してもらったんだ。なんて送ろう。今まで、メールなんてAクラスの人たちぐらいだったから、しかも送ったことほとんどないし。どうしよう。)
「真田君…」

はろはろ流離のコガラシだよ。真田君と優子ちゃん気になるね。

それより今日は、三国志から諸葛亮だよ。諸葛孔明の方が分かりやすいかな。蜀の劉備さんに仕えていたんだよ。諸葛亮は優秀な策士だったんだよ。この人は奇策があまり好きじゃなくてね、ほぼ確実に勝てると踏んだ時にしか攻めなかったらしいよ。だからよく魏延と対立してたらしいよ。そんなことより身長が１８０以上ったらしよ!!なんかみんなすごいね。身長高かったり、美少年だったり、天才だったり、どこまで本当のことなのか疑わしくなちゃうね。

１６話　バカと俺と昼食タイム

質問
あなたがカレーを作るとき隠し味に何を入れますか。

真田昴の答え
コーヒー
教師のコメント
コクがでておいしいですよね。

吉井明久の答え
愛情
教師のコメント
ロマンチックですね。

姫路瑞希の答え
硫酸
教師のコメント
冗談ですよね、入れたら舌が溶けますね。入れるのは絶対にやめましょう。

島田美並の答え
ブルドック
教師のコメント
ソースの間違えですよね。日本語が不慣れかも知れませんが頑張りましょう。

休日も終わり、Ｆクラスに行かないといけない。はあーやだなー。
「おはよう、昴くん。」←吉井
「おはよう…」←俺
「昴くん元気ないね、どうしたの？」←吉井
「ただなー、お前みたいな馬鹿ばっかのクラスに、行くとなると気が重くなるんだよ。」←俺
「今さらっと僕をバカだって言わなかった？」←吉井
「ああ、がっつり言ったぞ。あとお前は学校一のバカなんだから、まるで自分はバカじゃない見たいなこと言ってんじゃねえよ。」←俺
「昴くん、悲しくなるからそれ以上言わないで…」←吉井

教室に行くとちゃぶ台がミカン箱になっていた。これはひどい。

「お前ら席に付けー」←鉄人
「「「「鉄人!?」」」」」
「何で鉄人がいるんだ。」←坂本
「ああ、お前らが馬鹿すぎるから担任になってしまった。」←鉄人
「「「「はぁ？」」」」
「なんで鉄人なんだよまだ高橋史女の方が…」←バカ
「そもそもＦクラスには担任が無いんじゃなかったのかよ。」←バカ
「今日からＦクラス担任の西村宗一だ。お前らを０から鍛え直してやる。」←鉄人
「「「「「ひぇーーーーーーーーー」」」」」

「大変だね。Ｆクラスは。」↑工藤
「ああ、明久を筆頭としたクズばっかで困るぜ。その上鉄人なんてな。」↑坂本
「雄二、僕をバカ扱いするなんて…。」↑吉井
「実際バカだろ。」↑俺
「もうやだ。」↑吉井
　今は昼。なぜかＡクラスの人たちが来ていて、俺、吉井、坂本、秀吉、ムッツリーニ、島田、姫路、Ａクラスメンバーは霧島、久保、木下それに工藤だ。
「けどＦクラスは楽しそうでいいねー。」↑工藤
「なにが楽しいのよこのクラス。」↑木下
「優子、Ａクラスに戻ればー（ニヤニヤ）」↑工藤
「Ａクラスとしてみんなの模範とならないといけないのよ。」↑木下
「へえー、真田君に会いに来たとかとかじゃないんだ～（ニヤニヤ）」↑工藤
「なっ、何言ってるのよ!!これはみんなの模範となるためで…」↑木下
「優子あせりすぎー」↑愛子
　気にしないでおくか。
「僕はこのクラスいいと思うよ。　　…吉井君がいるし。」↑久保
「久保君呼んだ？」↑吉井
「よっ、吉井君!!吉井君は弁当はどうしたんだい？」↑久保
「食べてないよ。」↑吉井
「食べてない!?それはいけない。僕の弁当をあげるよ。」↑久保
「弁当を!?けどそしたら久保君のがなくなっちゃうじゃうじゃん。だめだよ。」↑吉井
「いいんだよ。僕、朝食べすぎちゃっておなかいっぱいだから。」↑久保
「いいの!?ありがたく食べるよ。いっただきまーす。もぐもぐ、これ

久保君が作ったの？」↑吉井
「そうだよ。」↑久保
「もぐもぐ、おいしいよ。これ」↑吉井
「明久君、私弁当作りすぎちゃったんですけど、食べます？」↑姫路
「えっ、あのその、久保君からもらったのがあるからいいよ。」↑吉井
うんこっちも気にしないでおくか。

ガラッ
「お姉様!!美春と一緒にお弁当を食べましょう。」↑清水
「美春!!」↑島田
このままだと面倒なことになりそうだから…
「清水。島田と弁当いっしょに食べていいから別の場所行ってくれ。」↑俺
「真田。私を売る気!!」↑島田
「じゃあお姉様、屋上にでも行きましょう。」↑清水
「いやーー」↑島田
島田がかかわるとすごいな、島田を引っ張って行ってるぞ。
「お姉様。デザートは美春ですからね。」↑清水
「いやぁーーーーーーーー」↑島田
いやーこれで少しは静かになる。
「外道だなお前。」↑坂本
「お前にだけは言われたくないな。」↑俺

「雄二、はい、あ～ん。」↑霧島
「オイ待て翔子。俺はちゃんと弁当あるし、自分で食べるからな。」↑坂本
「雄二、はい、あ～ん！」↑霧島
「おい話を聞いてるか？」↑坂本
「雄二、はい、あ～ん!!」↑霧島
「おい、翔子。」↑坂本
「雄二はいけない。約束した。付き合うって。恋人はこうするって雄

二のお母さんが言ってた。」←霧島
「くっ、お袋め!!」←坂本
「だから雄二、はい、あ～ん」←霧島
「俺は普通に食うからな。」←坂本
「雄二のイジワル…」←霧島

「いやーほほえましいね。」←工藤
「何がほほえましいよ。」←木下
「優子も真田君にやってあげれば。（ニヤニヤ）」←工藤
「どっ、どうして真田君に…」←木下
「じゃあボクがやってこよっかな～（ニヤニヤ）」←工藤
「だめよ。」←木下
「何でだめなの。（ニヤニヤ）」←工藤
「なんでって…なんでもいいでしょ!!」←木下
「ったく素直じゃないなー優子は。」←工藤

「にぎやかじゃの。」←秀吉
「ああ、Ｆクラスに更にＡクラスのこのメンバーだからな。」←俺
「姉上も素直になればよいのに。あれじゃ気付かれてもおかしくないの。」←秀吉
「何言ってるんだ？」←俺
「なんでも無いのじゃ。」←秀吉
「とりあえず俺は平和なクラスがいいな。」←俺
「今日はいい写真が撮れた。ボタボタ。」←ムッツリーニ
「こんなんがいないクラスに。」←俺
　ムッツリーニ鼻血をいちいち出しすぎだぞ。まあばれないところはすごいと思うが…

その後の島田と清水

「お姉様、弁当を食べましょう。」←清水

「真田、覚えときなさい。」←島田

「デザートは美春ですよ。」←清水

「美春、弁当食べるために服を脱ぐ必要はないのよ。」←島田

「さ、お姉様も服を脱いで。」←清水

「いやよいや、いやぁぁー」←島田

後はご想像にお任せします。

はろはろ流離のコガラシだよ。今日は竹中半兵衛だよ。この人はね戦国を代表する天才軍師なんだよ。だからね〝今孔明〟って言われてるんだよ。この〝孔明〟って言うのは前回紹介した、〝諸葛亮〟さんのことだよ。〝その容貌、婦人の如し〟って資料に残るぐらい女

性的だったらしいよ。すごいのは武術もすごくて、１６人ほどで、城を占領したことがあるんだよ。これが〝稲葉山城乗っ取り〟なんだよ。しかも竹中半兵衛さんかっこ良すぎてねその城を返しちゃうんだよ。何この人軍略だけでなくかっこよさも手に入れる方法、考えるなんて…天才すぎでしょ。流石は天才軍師、やることが違うな～

Ｏｈキドの講座

久しぶりじゃの。一話以来かな。さて今回から不定期で始まったワシの講座じゃ。今回は流離のコガラシのバカテスの好きな登場人物を言うぞ。

ムッツリーニ〉秀吉〉優子〉愛子〉雄二＝明久＝翔子＝姫路＝久保＝ＦＦＦ団＝根本〉〉小山〉〉〉清水〉〉〉島田

らしいぞ。まあこれは今まで出てきた人物であってこれからどうなるか分からんがの。しかしムッツリーニの扱いが難しいらしい。あとのキャラは常識人だったり、ヒロインだったり、ホモだったり、して出番なるけどムッツリーニは基本無口じゃからの。今後ムッツリーニを中心とした話を作りたいらしいぞ。